電車通りから四五間奥まつた路次に、鳥籠のやうな格好の揃ひの二階家が七八軒一廓をしてゐる。私の家はその一廓のうちで表に一番近いところにある。それでなくつてさへ小つぽけな貸家の、ましてや街の中のことだから、庭などといふもののあらう筈はない。でも、申しわけだけに裏に三坪程あるにはある。しかし、そこは、さる高貴な人のお邸に接してゐて、高い煉瓦塀で、ところがその煉瓦塀だけでもまだ不充分と見えてその上へもつて來てトタン塀をもう一層高くつぎ足して築いて、完全に日光を私の庭から遮つてゐる。おかげで立枯れになつてしまつた躑躅が二本、それにこれもやはり枯木の柘榴が一本。躑躅の方はひつこ抜いて、そこの片隅へ隠して置いたが、柘榴は厄介なことに、ちよつとした大木なものだから、どうにも仕方がない。手輕るに抜き取る事もならず、抜いたにしたところが、それの捨場所もない。どこかへ持ち出さうにも、この家の兩脇はぴつしり隣家へくつついて、人ひとりがどうやら辛うじてといふほどの空地とも呼べない空地なのだから、こんな枝を張つた木などは五十片(きれ)にでも切り刻まなけや、外へ運び出せもしない。もともと腰かけに住んでゐるのではあり、それ程の面倒をするがものもないので、木は枯れたままで立つてゐる。その枯木がまた、表を自動車でも疾

走する度にひどく震へる。それが例の煉瓦塀の上のトタン塀へ小枝が觸れてゐるものだから、ガタン〱業々しい音を立てる。家の小屋組は地震ですつかりゆるんでしまつたところへこの物音だから、知らない客はまた地震かと目を見据へるほどである。かういふ困つた木のほかには、家主が縁日ででも仕入れて植えたらしいつまらない灌木がそれでも、不思議に枯れもせずにゐる。これが色も香もない私のところの庭である。私は時々故郷の田園の廣い庭を思ひ出して、自分の都會での居住を、屢々自ら呪ふことがある。ついでに一般の都會居住者をも憐れむのである。……現在、この家に住んでゐるのが四人――でも、ひとりに四疊以上の廣さを占めることが出來る。

その人々とは第一が私。

それからA。

それからR。

それからT。

最後の人物だけちよと紹介するが此は私の內緣の妻である。半年ほど前からこの家にゐる。



で、大たいに於て私は幸福だと言つていい。即ち、平凡にもの事が運んでゐるの謂である。そこでつひこの間のことであつたが、――さう、まだ十日とは經つまい。或る雨あがりの美しい朝であつた。楊子をつかひながら見てゐると、三坪ほどの空地を掃くためにRは、庭箒と埃とりとを持つて、雪隱のうらへ出た……

「や!、どうもすみません。あとで掃除をします」

突然、さう言つたのは、脊中合せになつてゐる豆腐屋のおやぢだつた。それが思ひがけないところから首を出してゐたのだ。おや! 妙なところへ穴をあけやがつたな。私もその時始めて氣が付いた。それは私の家の雪隱の窓と向ひ合つて、豆腐屋では一つの新らしい窓を設けたのである。いや、まだ出來上つてはゐない。出來上りつつあつた。大工も何もない、ただ男がふたりで、鋸をゴシ〱操りながら家の脊中へ無雜作に、穴をあけたのである。大きさはまづ二尺平方だつた。朝寢坊な私の家でまだ氣づかないうちに、大部分の仕事は已に終つてゐて、細部を工夫してゐるところだつた。

私は豆腐屋の言葉には返事もせずに部屋へかへつた。言葉數の少いRも何一つ答へた樣子は

なかつた。
「今、ものを言つたのはうちへ言つたのぢやなかつたの？」Tがさう尋ねた。
「さうだよ」
「なぜなんとか返事をなさらないの？」

――――

私はこの窓が氣に入らなかつた。それや、自分の家の脊中へ自分で穴をあけるのは、こちらで文句はないが、私の家の雪隱とあまり近いからだ。彼の家と私の家との間はほんの二尺とはない。私の雪隱の窓から手を出せば、彼の窓に手がとどくどころではない、手は窓をとほして彼の家の空氣をつかむことさへ出來るのだ。――それよりも私はもともとこの豆腐屋を甚だ憎んでゐる。彼は、私の家から彼の屋根へ唾をするとか、ものを投げたとか、さては自分の家の脊中で埃を燃したりして貰つては、ここにはいい布團が納つてあるから燻ぶるとか、さういふ抗議を持つて家主へ私の家を排斥に行つたことがある。彼の屋根が汚くなることも本當であるし、埃を燃したので誤つて彼の家の板が少しこげたことも事實である。そのころ何しろ男ばかりの



家でだらしなくはしてあつた。しかし私の家の誰もわざ〳〵そのやうなことをしたことはないのである。私の家の二階の窓から何げなくやることが、みんな彼の家の屋根に落ちかかる。問題は家があんまり接近してゐることだ。なるほどまた、そんな市中で火を燃しては惡いとは云へ、たかが埃でせいぜい煙草の吸殻が蓄つて汚いからといふぐらいのことだ。それを直接私の方へ注意することか、わざ〳〵家主へ言つて行く程のものはないのである。しかし言はれてみればこちらが惡いのだからあやまつては置いた。しかしこちらから喧嘩をするつもりなら、彼と同じぐらゐな言ひ分はあつたのだ。雨がふると彼の家の物置きの屋根のしぶきが私の家の廓下へはげしく飛沫をあびせかけて、そこを開けては置けない。それは向ふの屋根が遠慮もなくこちらへ突き出して來てゐるからだ。また火を使ふ商買である彼の家の煙突が非常に低くつて風の工合でその煙が私の二階へ吹き込む。煙だけではない、その低い煙突のところへ鉋屑や紙屑を放り込むと見えて、その燃料の形をして火の子が盛んに舞ひ込む。夏のうち、白い干しものでもしてゐると、その爲めに汚れるほどである。それだけの低さの煙突ならば、きつと石炭を燃す筈で警察は許可してゐるに相違ない。だが、近所合壁で一々そんなことを言ひ合つて

ゐては仕方がない。私たちはただ相手が自分の受ける不快だけ知つてゐて、自分の與へる不快を一向氣づかない蟲のよさを苦笑してすましてゐた。

それだけならば何でもなかつたのが、この春のころの事である。私は或る家から小犬を預けられた――轉居するに就て今度の家は新築で、隣家との間にまだ垣根が出來てゐない。直ぐに垣根をこしらへるからほんのしばらく預れといふのであつた。（私の犬好きは有名だつた。）それはまだ二ヶ月とは經たない小犬だつたので直に私の家に馴れた。それが或る朝見えなくなつたのだ。捜すと、近所の子供の話に、犬は豆腐やのおやぢに殺されてどこかへ持つて行かれたといふのである。理由は、小犬が豆腐やのひとり子にぢやれついて子供は大きな聲で泣いたのださうである。もう少し大きな子供の見聞では、おやぢがいきなり出て來て、鑑札も何もない奴だ、殺してもいいのだ。狂犬かもしれないぞ、と言ひ乍ら太い鐵の棒で頭を打据えた。小犬はその場でクルツと一まはりするとそのまま打倒れた。そいつを豆腐やはつまみ上げて行つて、大通の泥溝のなかへほぼり込んだといふのである。そこへまたもうひとり別に近所のそばやの小僧が來て、犬はまだ死んではゐない。溝のなかでもがいてゐたのを小僧自身拾ひ上げて、



泥だらけだつたから水をかけて洗つてやつて來たと知らしてくれた。飯たきを頼んでゐた婆やが、その事をまだ寢てゐる私に報告に來て、その瀕死の小犬を一たいどうしようかと相談をした。仕方がない、放つて置かう。死にさうになつてゐるのを動かすものも惡いし、それよりはそんなに苦しんでゐる者を見たくない。その代り死んでしまつたら、おれが自分で行つて豆腐やの店さきへ投り込んでくれるからと言ひながら、私は起き直つた。婆やは自分のせゐのやうに詫びて、庭から外へ出さないやうに注意してゐたのだつたのに、犬は自分で出たのだと言つた。また、尤も豆腐やは二三日來業を煮してゐたかも知れない――犬は與へてやつた寢床を寒がつて、豆腐やの床下へもぐつてそこに寢てゐた。時々鼻をならすものだから豆腐やでもうるさいと思つてゐた折からだつたのだらうとも言つた。婆や自身もうるさがつてゐたらしい口吻が私を一そう不機嫌にした。窓の外はじめじめした春雨であつた。私は豆腐屋のトタン屋根へ唾を吐つかけてやつた。さうしてこんなせせつ込ましいところへ犬なんど預けに來た人間まで腹立たしくなつて來た。

通には死にかかつてゐる小犬を見るために人だかりがしてゐた。とさう來客のひとりが話し

た。それや私の家の犬だ。まだ死なないでゐるのかと問ふと、八分どほりは死んでゐたといふ事であつた。そのうちに私の家の前がどや〳〵と騒がしくなつて、近所の子供たちがうちの婆やを口々に呼びかけた――おばさん、犬が來たよ。おばさん。犬が來たよ。

よろめいて辛じて歩いてゐた。一心に地面を嗅ぎながら、目はつり上つて、呼んだけれども瞳を動かすことさへも出來ないらしかつた。不憫を感ずる前に物凄かつた。頭は腫上つて、ぐつしよりと泥に濡れた體は板のやうにつぶれてしまつてゐた。まだ朝飯もやつてなかつたのである。食物を與へたがもとより見むきもしなかつた。二日間、小犬は水さへ飲まなかつた。しかし回復した。私は喜びながら四這ひになつてよろめいて歸つて來た犬の眞似をして皆を笑はせた。興に乘じて、私は獨白で犬の心理描寫を試みた――……俺はひよつとすると今死ぬかも知れない。……俺のまはりのこの人だかりは俺を見物に來てゐるのだな。……それにしてもここはどこだらう。さうだ。ここはどこかの道ばたぢやないか。――俺は道ばたで死なうとしてゐる。みんなは俺を宿なしの野良犬だと思ひ込んでゐるに違ひないが、俺はそんな者ではない。ちやんとした家がある。家の人たちは俺の事を案じてゐるだらうな。然うだ。ここでこのま



ま死んだのでは俺は死恥を曝すのだ。ともかくも俺はどうにかして吾が家へ歸らなけやならない。それがこの際の急務だ。……そこで、犬を眞似て倒れてゐた私は、よろめきながら立つて――……それにしても俺の家は一たいどの方角だつたらう。――犬の私は目を引きつらせて鼻を疊にすりつけてふら〳〵と歩き出した……

---

すべてはTがまだこの家へ來る以前のことであつたから、彼女は私が豆腐屋を憎んで口も利かない理由は知らなかつたのだ。實際、私は諸君が冷靜に考へるより案外この豆腐屋を憎んでゐるのだ。最初はただ身勝手な男とばかり思つてゐたのを、その後「花を愛するものは詩人だ。動物を愛するものは善人だ」といふ私の箴言によつて、私は豆腐屋を惡人の仲間へ入れてしまつた。又、鑑札を受けてゐないから殺してもいいといふ彼の正義觀がへんに私に氣に入らなかつた。私の家では彼から豆腐を買はない事にした。尤も豆腐を私はあまり好きではない。ところでこの男が私の家の便所や庭（といふのも、前述のとほり滑稽だが）を唯一の眺望として勝手に窓をつくる。それから、いやどうも濟みませんなどと、自分の都合の惡い時にはなまなか

温和さうに人並の口を利くのだ。そんな男に返事をする口は私は持たない。私は身分によつて人を侮蔑した覺えは一度もないだけに、相手を高が豆腐屋のおやぢとは思へないで、その厚かましさを憎むのである。そのくせ私は當の豆腐屋のおやぢの顔は別に見覺えてもゐない程である。この種の私の偏窟は實におとなげなくをかしいものであることを私は自分で氣がつく。どうもをかしくつても仕方がない。

ともかくも、私は豆腐屋には返答をしなかつた。私のつもりでは、豆腐屋がそこへ窓を設けたことを、私が認めないのである。

窓と窓とはこのやうに向ひ合つて、私の家の便所からは隣の一室は見とほしになつた。先方でそんなへんなところへ勝手に窓をこしらへたのを、何もこちらで遠慮をしてやることはないといふので、私は敢て私の便所の窓をしめてやらない。先方ではガラスに紙を張つたものを嵌込むやうにこしらへてゐるのに、何故かそれを開放してある。かうして私の便所の窓も亦、一つの展望を持つことになつた。

その部屋といふのは、離れ座敷で——座敷といふのもをかしいが、ともかくも一つの獨立し



た屋根の下にある。そのトタン屋根は前に私たちがそこを汚くするといふので抗議されたところだし、その床の下は例の小犬がもぐつて行つたところなのだ。屋根の大きさから判斷すると六疊ほどある。しかし、便所の窓から見えるところによると押入れがあるやうだから四疊半だらう。そこにひとりの男が世帶を持つてゐる。どうも新らしくそこへ住む事になつたらしい。豆腐屋が部屋貸しをしたのだらう。さうしてあまり薄暗いとでもいふので、あんなところへ窓を開けたらしい。この同居人——私にとつて新らしい隣人は三十すぎの男だつた。それ以上には、どんな顔の、何をする男だらうといふ程な興味すらも私には持てなかつた。ただその新らしい窓に對する敵意もどうやら薄らいだ。豆腐屋のおやぢなら、もし間違つて紙屑一片でも投げたら吐鳴りつけてやらうぐらいの氣持は、この窓に對してもう無かつた……

「男やもめに何とかと言ふけれども、一たいどんなことをして暮してゐるのでせうねえ」女には多少の興味があるらしくはそんなことを言つてゐたけれども、その後、話題にならなかつたところを見ると面白い發見も別になかつたらしい。それが、一昨晩のことだつた——

客があつてみんな二階にゐた。不意にTが下から呼んだ。

「Aさん！　Rさん！　おりて來てごらんなさい。珍らしいものがあるんだから」
　何か常談らしいのだが、その聲がほんとうだつたからAもRも下りて行つた。それから梯子段のところで何か話し合つてゐる。客といふのは極く親しい人ではあり、私も何かと思つて客をほり放しにして下りて行つてみた。Tは梯子段の中ほどにゐて、例の窓の方を指しながら性急に囁いた——
「いま、お嫁さんが來たんですよ。——え、お嫁入りですよ。周旋屋がつれて來たの。周旋は兩方から十五圓づつとるのですね。金を受取つてゐたわよ。それから里がへりがどうのなんて、いろんなことを言つてゐるのが聞えたわ……」つまらない事を發見して來てTは子供のやうに珍しがつて喜んでゐる「氣の早い。もう丸髷を結つて來てゐるのよ。ちよつと覗いてごらんなさい。」
　私もちよつとして興味に驅られて覗いて來てみた。なるほど丸髷の女、二十五六のがひとり窓の正面に見える。しかし私はそれ以上に覗込むほどの好奇心もなかつた。ただ、こんなところ——便所の窓から、こんな結婚式を見ることが一種奇妙にをかしかつた。ユーモラスといふ



ことの正當な意味はかうでもあらうかと思へる。聞けば隣人はともかくも羽織にセルの袴をちやんと着用してゐるさうである。眞面目なめでたい結婚に相違ないのだ。その花婿に周旋屋が「お前さんもまあそのうち、それや一週間後でも半年後でもいい、懐の都合もあるだらうから工面のいい時に、一つ花嫁の實家へ二人づれで行つて安心もし安心もさせたがよからう」といふやうなことを云ひながら、十五圓受取つてゐたさうだ。外にも三四人ぐらひの人がゐると見えて、酒氣を帶びた談笑の聲が手にとるやうに聞えて來た。
「さう〳〵」とTが思ひ出したらしく言つた「さう言へば、きのふお友達らしい人が來て話をしてゐたのはやつぱりお嫁さんの事だつたのね。十八九のがひとり、外にももうひとりあるが、それは少し年をとつてゐる、二十六七だから。やつぱり若い方がいいだらう。とさう言つてゐたが、年とつた方がよかつたと見えるわね。歸りぎわにそのお友達のやうな人が、財布でも開けて云つたのでせう——つまらないな、一錢銅貨一つだつてありやしないといふと、だからさ、飯ぐらゐ食つて行けよ——と隣の人が言つてゐてよ。あれさ潟の人ぢやないか知ら。そんな言葉つきだけれど。」

するとR無口のRが言つた「今考へると、おとつひも面白いことがあつたのです——やつぱりそのきのふの友達かも知れない。ふたりでね、自由結婚論をしてゐたつけが」

「ふむ？　どんな自由結婚論をね？」

「いや、何でもない、たゞ、男は三十以上、女なら二十五以上、勝手に結婚することが法律上いいといふやうなことだけですけれどね」

「どんな男だい、俺はよく見ないが」

「さあね。わからないわ。髮を分けて眼鏡をかけて。ニコ〳〵がすりの單衣などを着て、何を商賣にする人だか知らないが、夜なべに袋はりなどしてゐたわ。きつとお嫁さんを貰ふのでかせいでゐたんでせう。簞笥見たやうなものもあるし、鼠入らずなども買つて來てありますよ」

隣の談笑は十一時半ごろまでつゞいた。私たちもそのころまで隣の噂をした。それぞれ寢に就かうといふので便所へ入ると、又新らしい發見をした。それは手まはしのいい丸髷の花嫁と思つたのは間違ひで、あれはいづれ世話をした友達の女房か何からしくもう歸つてしまつてゐて、その代りには、やはり昨日の話のとほり若い十七八の島田髷がひとり殘つてゐたさうである。——これもやつぱりTの發見である——「ガスの着物にメリンスの帶で、島田だけはでも結立てよ」。私はまた私で誰も見なかつたけれど男の聲だけを聞いた。それは何のことだかは知れないけれども「正直にやつてさへすればね」といふ一言だけだつた。

寢る前に二階の窓から首を出してみると十三夜のこの上なく靜かな月夜だつた。そのせゐもあるだらう、私は「正直にやつてさへすればね」と言つた新夫婦を祝福する好い隣人の心を持つてゐた。さうだ、そのとほり「正直にやつてさへすればね」！

次の日の朝になつて、——つまり昨日の朝だが、私は多少の好奇心を持つてそつと隣をうかがつて見た。男は窓の方をうしろにして明るい方に机に向つてゐた——そこに机などといふ器具があつたことは、少し意外だつた。男はその机によつて手紙を書いてゐるらしい。すでに書き上げたのが五六通ばかりもそのうしろに置いてある。女は？　少しのび上つて注意してみると男のうしろに、お尻を向けてあつて疊の上へこごみ込んでゐる。さういふ新境界に於かれた男女の自然な狀態として單にてれてゐるのだといふやうにも思へるし、また妙に不安のある靜かさのやうにもある。何か氣に入らない事があつたのぢやないかなと、人ごとながら少し氣が

かりだつた。朝飯を了つてそれから新聞をのこりなく見てから、私は唾をはくために庭の方へ首を差延べた。さうして何氣なくその方を見ると、あの小窓はここからも見えるので、そこへ深く肘をかけた女がぢつと腑向いたまま私のすさまじい庭の土を見つめてゐる。この朝はその前夜のよい月夜に比べて思ひがけない雨だから、そのやうな様子をしてゐる女が少し陰氣すぎていけない。

それでも、そのうちに、私は隣から洩れたごく低い笑ひ聲を一度聞いた。

今日は昨日よりもよけいに話聲がするではないか。

今も笑ひ聲が聞える。又、鋸の音のやうなのがしてゐるが、今度はもう窓を展くのではあるまい。恐らくは閉すのであらうか――工合の思はしくなかつた硝子をもう一度細工しなほして。それがいい。私たちはもう覗かないつもりだけれども、それにしても、もう秋冷を覺えるではないか。

「秋ふかき隣は何をする人ぞ」



# 車窓殘月の記

頗る朦朧としてゐる。もう十年の歳月を經てゐる。朦朧としてゐるのは、しかし、歳月のせゐばかりでない。その事の最中に於てさへそれは頗る朦朧としてゐた。何しろ、私は寢呆けた頭で視察してゐた。その上また、その主人公たちが、どこの何人だか知らないのはもとより、どんな顏つきをしてゐたのか、それさへも私は滿足には知らないのだ。もしかしたら夢ぢやなかつたかと思ふくらゐだ。いや、夢だつて、時にはもつとはつきりした印象を殘す。それほどだから、人が聞いたらあんまりあつけない話なので定めし氣に入るまい。――そこがまた私に面白い。頭も尻尾もない人情本の一くさりが、それとてもちぎれちぎれに、ひよつくり自分のそばに在つた。つくり話にしては間の拔けたことでも、本當にそれがあつたとなると興の催されるものがある。ところで、これが本當にあつたと知つてゐるのは私ばかりだ。そこでこの話は結局、私ひとりが面白いのかも知れない。――と、さう決つてしまへば、もう書くものはない。それぢや心細い。第一困る。だからもう一度出なほして、ともかくも、朦朧なら朦朧なり

に一とほりだけ話をして、それから、うつかり最初に書いてしまつたこの一節を、諸君には最後に思ひ出してもらふわけにはいかないか知ら。

夜汽車である。

八時三十分に新橋驛を出た。むかしの新橋驛を。

暮もやうやう押迫つた二十六日であつた。それでゐて、汽車は思つたより隙いてゐた。

私はといふと、ふいと思ひ立つて長崎あたりまで旅行がして見たくなつたのだつた。切支丹の殉教者のことか何かを調べるつもりで。私は二十一歳の少年であつた——思へば元氣なもので一日二晩三等列車で搖すぶられつづけて、けろりとしてゐたのはわれながら今は羨しい者である。——が、さう直ぐに長崎まで行つてしまつたのぢや、話が行き過ぎてしまふ。今話さうとする出來事は、まだほんの道中でふり出しに起つたのだから。といつて、それが何處からなのだか、そいつが旣にはつきりと判らない。ただ、私は今もいふとほり夜汽車の三等室に、相



客がないのを仕合せと二人分の座席の上へ、例の犬のやうな形で犬のやうな眠をうと〳〵と眠つてゐるのであつた。——と、搖ぶり起された。が、多分、人が搖ぶり起したのではない。車がどこかの驛に停つたはづみか、或は驛から出るはづみかに、私の體がどしんとゆれて、それに人のどさくさのけはいで目が明いたのだらう。大きな驛だつたらしい。人が澤山車內にまだ落着かずにゐた。それから寢呆けてあたりを見廻してゐるうちに、車のなかはいつの間にか殆んど滿員になつてゐた。私は大へん眠かつた。常に私のわきに座らうといふ人もない。それで一つくるりと寢返りをしてまた眠り出した。……うまく眠らうといふ間際に、ふと私は自分の耳もとで、囁く聲とすすり上げて泣く忍び音を聞いたのだ。それが男の聲と女の聲とだ。私はもう一ぺん目を明けた。それから聲がしたと思ふ方を無意識にきよとんとふりかへつた。聲はやんだ。それは私の直ぐとうしろの、私のとは脊中合せの座席から洩れてゐたのであつた。私はもの好きにその方を視た。島田髷の襟脚がくつきり目についた。それが私の眞うしろであつた。だから襟脚だけで顏は見られなかつた。その若い女の隣には、ハンチングを冠つた横顏があつた。私がふり返つたとたんに、横顏は私の視線からそむけられた。私自身と同じぐらゐの

年輩の若者だつた。と私はたつたそれだけのことをやつと見ることが出來ただけだつた。

このハンチングも島田髷もいつどこからこの車に乘り込んだものか私は知らない。私が眠り込んでしまはない以前には、そこには、私に何の注意をも促さない乘客があつただけのやうに思ふ。島田髷ならもつと早く氣がついたらう――私が眠り込んでさへ居なかつたら。ともかくもこの時始めて氣がつくと、うしろの座席はいつの間にかこのふたりに變つてゐたのである。

すすり泣きの聲で目が明いて、反射的の動作でこのふたりを見出した時に、彼等はその囁きと泣き聲とを遠慮したが如く、私もまた彼等に注意することを遠慮して、もとの姿勢にかへつた。遠慮したばかりでない。實はそのことより好奇心の方が多かつたのだ――嘘をついてはなるまい。さて私は再び寢入つた人のやうなそぶりをした。すると、案のとほりしばらくしてまた囁きが始まつた。やつぱり男の聲である。汽車の轟きのさなかに洩れたのは、とぎれとぎれであつた。――全身耳になるといふ句法は外國語からの誤譯ださうである。誤譯だつて何だつていい、全身が耳になつた。……作者として、ここで私は、それほど苦心して聞き得た言葉を寫し出すのがどうやら本當らしい。ところで私は、その時自分がやつと聞きとつた言葉の一き



れ一きれを、今は美事に忘れてしまつてゐる。第一に覺えてゐられるほど完全には聽けなかつたのである。でも、その言葉のニュアンス――氣持だけは殘つてゐるから、それを辿つてつくり出して見ることも出來なくなさそうだが、無理にこしらへてまづかつたらつまらない。さう思ふと、今更どうも臆劫になる。そこで無性をさせて貰ふのだが、要するに、その若い男が娘に囁いてゐる言葉のきれぎれを、その場でさまざまにつなぎ合せて見てその時考へたところに據ると、最初私は見て取つた――これや女はどこかの商人家(あきんど)の娘だ。さうして男の方はその店の若い番頭だ。それに違ひない。さういふ言葉づかひだ。それに東京の言葉ぢやない。どうも手に手をとつた驅落者らしいと思つたのに、……必ずしもさうではないらしくもある。女が逃げたのを男が追つかけて行つて捉へて來たものらしい。男は女に、家へかへることをすすめてゐるからだ。しきりに勸めてゐる。勸めてはさまざまになぐさめてゐる。それにしては、男と女との間柄がいつの間にかまたどうやらはつきりしなくなつて來た。男がこの女の思ひあきらめた戀人らしいところもその口ぶりのなかにある。言葉の内容にためいきの影がある。かと思ふと、ただの追手らしいきつぱりした口ぶりでもある。……何にしても、女が何とか口を開い

てくれなけや見當がつきかねる。それだのに女はさつきから、まだ一口も言はない。ただ男に同じやうなことを何度でも何度でも言はせてゐるばかりだ。女の沈默の間を、汽車は多分十哩以上も走つたであらう。そばで聽いてゐてももどかしいくらゐだ。かういふくどさは戀人たちでなければ持ち得ない。それにしても女はどんな氣持でゐるのだか、私には全くわからなくなつた。全然わからないでしまつたかも知れない——もしこの時、女がいつの間にかしくしくと泣き出してゐなかつたなら。

女は泣き出してゐた。

それはさつき私を愕かせたやうなヒステリカルなものではない。靜かに、かすかに、すすり上げてゐるのであつた。その泣き聲によつて掻き消されてしまつたかのやうに、男もたうとう默つてしまつた。

女のすすり泣きがまだつづいてゐる。その泣き聲が、へんに、私には誰だか知らない美しい女の面影を呼び起させる。——私は彼女の樣子を見たくなつた。と言つて、私が身動きをしてしまつたのでは、せつかくの彼等の空氣が亂されてしまふだらう………



「やつぱり、さうより外には、外には仕方がないのね。……かうして、この汽車からあんたが下りて行つてしまへば、わたしはひとりでうちへ歸つてしまふことになるのだわ」

女の聲が思ひがけない時にさう言つた。聲は男のものよりもはつきりとしてゐた。私は、ふと冷淡なことを考へた。女が男の言つただけの口數を利くとしたら、このふたりの事情を私はもつとはつきり知るだらうといふ事だ。ところが男の鈍い低い聲は、とぎれとぎれにしか聞けない。聞きながら私は想像を働かせなけやならない。——で、その男の聲で、

「歸つてしまつて、あなたをひとりで歸してしまつて、それからはもうなるやうになるより外には仕方がない。……ふたりで一緒に出て來たわけではないのだから、いづれは事なく濟んで、すべては運んで行くだらう。さうさせたいわけではないのに、……さうなるより外には仕方がない。……どうして家を出たかなどと、うちでは多分そんな詮議はきつと、しても見ないでしまふぐらゐなものだらう……」

と先づ、男の言つたことは、どうやらそんなことらしかつた。やつぱり全く、男はこの娘の戀人だつた。私はもうきつぱり判斷した。それに私は私の空想を蔓草のやうに延ばして行くが、

この若者はこの娘としめし合せて、家を拔け出て來たのだ。しかし、若者は、氣の弱い若者は今更に後悔をして女を主家に返さうとしてゐる。いや彼等はもうどこかで別れて來たのだ。――どういふふうに泣いてたかは知らないけれども。さうして今はもうその果しのない名殘の餘韻(トレモロ)をむせび泣くのであらう。女を返してかの男自分自身は、どこかへ、多分は自分の在所へでも歸つてしまふにちがひない。さういふやうなことを言ひつづけてゐるではないか。男が何か言ひ出しさへすれば、女は、それが返事でもあるかのやうにきつと泣き出す。今度は泣きながらものを言ふ。子供のやうにしやくり上げて泣くので、せつかくの言葉がどうも私にはわからない。だが、男にはそれで判つてゐるものとみえる。

それが突然ものを言はなくなつてしまつて永い沈默に代つた。私はそこで、そつと、極くそつとふりかへつて見た。ふたりは席も亂さずにきちんと夜の小島のやうに並んでゐた。思ひがけなく愼しいのが偸み見た目にもなかなかにいとしかつた。誰か、近い座席に無作法にも目をさましてゐる人があつたのかも知れない。

「ごらんなさい」と女が固い沈默を破つた。渇いて舌の根がひきつてゐるやうな聲音であつた。



「――そら、月が出て。――なんだか、なにもかもほんとうに夢のやうに。ねえ。さうでせう。」

私も目を開けて見た。

海の上に、さして高くないところに、二十日すぎの月があつた。伊豆半島であつたらう。島影がきつかりと浮んで、近い磯には浪が荒れてゐた。風が出たと見える。程近くにひるがへる浪の穗があざやかに消えては立つ。立つては消える。「何だか何もかも夢のやうに。」――これがもし私のつくり話の小說なら、私はこの際、娘にそんな仕入れものらしい言葉を言はせはしない。だが、その娘は、事實の女は、ほんとうにさう言つたのだ。これだけは、この一言だけは、言葉のままをその夜の月の風景と一緒に、はつきりと私は覺えてゐる。だから、ここでそんなセンチメンタルな安つぽい言葉を嫌ふ人々は、その苦狀を私には言はないで、その娘の方へ持ち込んでもらひたい。………それはともかくも、今まで眠いのをぢつと辛棒してゐた私は、たうとういつしか再び眠入つてしまつた。

………どや／＼と人の慌しい立居のけはひに私は目が覺めた。夜は白んで、窓はもう殆んど明るかつた。私はすぐ自分のうしろの座席に氣をつけて見ることを忘れなかつた。私はふり

かへると、島田髷の娘が立つてゐるうしろ姿を見た。彼の女は手を差し延べて荷物棚の上から着替への一枚も這入つてゐるらしい風呂敷包みをとり下してゐた。彼の女はもうひとりであつた。車を降りようとする群集のなかに雜つて、私に背を見せてゐた。私は念のためにあのハンチングをもう一ぺん車中の群集のなかに捜して見た。

決して見當らなかつた。

「名古屋！　名古屋！」

驛夫が私の窓の外をさう呼んで通り去つた。

冬の夜明けの凍つてゐる窓がらすの上に自分の額を押しつけて私は、自分の息吹きで曇つたがらすを手套の手で淨めながら、その娘の姿をいつまでも見送つてゐる用意をしてゐたのに、それをつひプラットホームの人ごみのなかで見失つてしまつた。

私はこの女主人公の横顏を、彼の女が車からプラットホームに足をおろす時に、ほんの一目見ただけだつた。別に美しくもなかつたし醜くもなかつた。



——只、それだけの事である。

それを、私は、東海道をたびたび通りすぎる折ふしに、岩淵、興津などといふあたりの海岸にさしかかると、私は實に屡々あのふたりを思ひ出すのだ。——あの車窓の殘月はたしかこのあたりではなかつたらうか。——彼等は一たい沼津あたりから乘つたのぢやなかつたらうか………などと。つひ、人の世の別れといふものから、いつの間にか自分のことなど考へてゐる——が、それはここでは用のないことである。

この小品は我々の文字で刊行される最も普及的な婦人雜誌に出ることになつてゐる。だからこの雜誌を手にして何ごころなくこの頁を繰る人のなかに、今はもう三十に近くなつて子供のふたり三人もあらうかと云ふ人が、ふとこれらの文字に目をとめると顏色が少し蒼ざめて、料らずもむかしのことを思ひ起しながら、むかしは——あの時は悲しかつた。しかし今はもう忘れた。さうしてすべては幸福である——としばらくは思ひに沈むとしたら、それこそ、もつと

小說的であらう。



# 北海道へ

（ほかに書くこともないので身の上話を一つ）

北海道へ行かうと思つてゐる。

行かなければならないわけではないが、行つた方が氣がすむ。

北海道には父の農場がある。

——昨日Nの方より別書參りTの大膽にあきれ候伜Kも同樣の人物一月以來やかましく申遣したにも拘はらず惡い事ばかりたくらみ候事憎い者共に候今後の方針についてもN一人にてよく計畫し實行し得るや疑問に候へば貴許も筆硯多用とは存じ候へど一度渡道してくれては如何野父も明治三十年始めて渡道いたしそれよりの畫策にて隨分永い間の事管理よろしきを得ば今は優に一財源となり一家經營にも都合よかりしを今更殘念に候將來も少しの仕方により貴許の代に相成候て相當のものになり可申兎に角惜しむべき次第……

父からの手紙には、かうある。

明治三十年と言へば、父が三十六の時である。私が六つの時である。三十六になつてそんな遠方にさういふ新らしい事を企てた父の氣持は、いま三十三になる私にもどうやら解る。

父は何で、そんな遠いところを思ひついたかと考へてみるのに、明治三十年といふと、父がよく話をするあの熊野川の大洪水の數年後で、あの洪水の時に崩壞した十津川村民の北海道の新十津川村への移住後の成績なども判つて、その新らしい消息が父の興味を呼んだのではないだらうか。

回想する。

私がまだ中學へも入らないころのことである。私が無口な人嫌ひな性質であるのを見て、父は私を農夫にしたらよからうと思つてくれた。子を見ること親に如かずといふ古言も、私はその後、屢々父から聞いた。醫者でありながら父は、私にその業を繼がせようとは必ずしも思はないらしかつた。その代りひどく農夫にしたがつた。父は煩はしい醫者の、ことに町醫者の境涯には、自分でもう懲々したものらしい。私の祖先は幾代か醫者の學問をした農夫だつた。母方も祖母は農家の出だつたし、祖父は武士と言ひながらも和歌山藩のお庭奉行だつた。農夫



になつても私は祖先の業をつぐわけであつた。

北海道の開墾地と私とは父の一つの夢であつた。

私は六つの時に父が催した運座の席で十七字を並べた。十になつた時にはおほろけに文學といふものの魅惑を知つた。十三の時にはそれが動かせない志になつた。それでも父は私を後々札幌農學校へ入學させたいと思ひつめてゐた。父は私に「札幌農學校」といふ名のその學校から出た、沿革史と入學案内とを兼ねたやうな書物をくれた。へんにぐるりのギザ〳〵な――いま思へば菊判アンカツトの書物で、それが絹糸をリボンのやうにして綴ぢてあつた。よく覺えてゐるが、その表紙にはスケツチ風のペン畫でその學校の校舍かと思へるやうな建物の繪があつた。父はその本をところどころ讀んでくれた。吾徒はこの新天地自由なる學園を拓きといふやうな文句がたしかあつたやうに記憶する。その書物の體裁は私の氣に入つてゐたが、そこが自分の這入るべき學校だとは、私はどうしても思はなかつた。

たしか十七になつた時、夏休みに、私は母につれられて始めてそこへ行つて見た。廣々とした樂しい野原や森を見せたら、そこに住んでみたいと思ふやうになるかも知れないといふのが

父の空頼みであつた。この時の旅は、私にとつては三度目の大旅行であつた。私は六つの時にその兄の死に目に會ひに行く母につれられて一晝夜の間汽船で海を渡つた。母の里は和歌山市であつた。私の故鄕は同じ縣下だけれども伊勢の方に近い。この半島の尖端にある。その時の旅ははつきりと記憶にあるが、しかし全く斷片的である。しかし別世間を見た驚きは生涯の最も强い印象になつてゐる。私は一日でも母と離れてゐられない子であつたし、(初めての男の子で母の祕藏つ子で私は中學に入學するまで母に抱かれて眠つた)小學校へ入學する前に、汽車などを見せて置かうといふ父の心づかひで母について行つたのだ。母の兄は死んだ。六つの私は旅さきで夜半に目がさめて、死といふことを考へさせられて困つた。或る晩、歸つてみたらお父さんも死んでゐるのぢやあるまいかと言ひ出して、母が心細さうに叱つたのを記憶する。十一の時に私は大阪にあつた第五回全國博覽會を見物に出た。この時は姉と一緒であつた。それから前記の十七の時の北海道への旅が第三回目である。

しかしこの旅は父の目的を滿すことは出來なかつた。私は大森林を見、アイヌとその小屋とを見、平野を見、そこに一面にある月見草の花を見、栗鼠といふものを見、十勝の平原を馬に



乘つて一ケ月近く遊び暮しながら、專らツルゲニエフの文學と國木田獨步とを思うた。歸りにはやはり母と一緒に松島へ立よつて、そこでしぐれと晴れて行く月とを見た。思へばそのころから私は旅を愛するやうになつたのであらう。

第二回目に私が松島へ行つたのもやはり母と一緒で、やはり北海道への途中だつた。あの內海は浪が靜かだがそれでも小さな帆舟で渡ると、慣れない者はひやひやする。それに、その日は風があつた。母も私も少しひやひやした。景色どころではなかつた——怖しかつた、とその時のことをいつかも母と話し合つたことがあつた。この第二回目の北海道行きは、さうだ。私の二十六の時だ。つひこの間とは思ふのにもう八年も前だつたと見える。秋だつた。開墾地のなかの溪谷は紅葉してゐた。——その時のことを私は「私記」といふ題で書いてある。(あれはすこぶる不出來なものだが)その時の私は父母の意にそむいて文學をやりながら名を得ず、父母の意にそむいて娶つた妻を既に去つてしまつて、さうして父がむかし私の爲めに用意してくれたと言へるその土地に來てみて、私はその現場で母にしみじみと話しかけられた。それはそれとして、今思へば、すつかり信用して委任してあつた男は、そのころから少しはあいまいな

ことをしてゐたのぢやないかと思ふ。何げなく私の言つたことを、ひどく氣にして酒をのましてゐたせゐもあつたが、くどく喰つてかかつたその様子が、私には直覺的に氣に入らなかつた。しかし母は割合にその男を信用してゐたらしい。

事業が一向に實が擧らないと思つてゐたら、それが信用してゐた男に好きなことをされてゐたのである。ただ土地を人手に賣拂はれなかつただけで、その外のことは皆やられてしまつたらしい。年貢は費ひ込まれてしまふし、盗伐はされるし、その擧句にはその男は樺太へ遁げて行つてしまつた。何しろ、仕事はせずに博奕で敗けてばかりゐたのだといふから思ひやられる。匿名の手紙で密告狀があつたので、やつと氣がついて、弟のNをやつて見たら想像以上の始末らしい。細いのは炭にまで燒いて賣つたので立木などは一本もないから、もうこれ以上に悪いことをやられる心配はない、とNはやけのやうなことを長い報告の手紙に書いて來てゐる。

博奕をしたのはよくない。信用を裏切つたのはよくない。――どうも、多分よくないだらう。しかし永年預つてゐたらつい自分のもののやうな勝手な氣にもなるだらう。人に預けて置いたのがこちらでよくなかつたのだ。さう思ふと、罪は何故だか私自身にあるやうに思ふ。私が父



のいふとほりそこの土地にゐたらそんなことは多分なかつたらう。それとも私自身がそんなことをしでかしてゐなかつたとも言へない。何にしても私は父に對して、少し――ほんの少しではあるが申わけないやうな氣持もしないではない。私は無論、自分が今日の自分であることを大たいは後悔してゐない。私は文學者として決して酬いられてゐない事はない。いや、自分の才能に比べて私はきつと感謝しなければいけない程だらう――私などよりも才能を抱いて遂に世に出なかつた人も古來多かつたらう。それ故、今日では父も私が自分の欲するところに志したのを好しとしてゐてくれる。それでも私は、自分が百姓であつたらもつとよかつたのぢやないかと思つてみることが、時々ある。

父は北海道へ植林したいといふことを永年言つてゐながら、つい實行せずにゐた。それが、今そんな荒涼たるざまになつてゐると聞いて父は永年の宿志を果さうと思つてゐるらしいのに母は言ふさうだ。今までとは違つて、もうこの齢(とし)になつて出かけて見に行くことさへおぼつかないやうなあんな遠いところへ、いつどうなるやら知れないやうなことに金をかけてみても仕方がない――かう、母は反對なのだ。つい數年前までは女ながらに、ぶつとほして五日もかか

るほどの海と山との間を三度や五度は行き來もした母だ。ひとり旅をさへしたものだのに。
母のそのやうな反對を無視して、しかも今までにあんな失敗だけをのこしたところへ、思ひ切つて計畫を實行してみることも、父には躊躇される模樣である。——そんな心持を述べた手紙もあつた。その次に來た手紙には次のやうにも書いてある。

——貴許も一管の筆をもて身を支へ其上の餘裕とてはもとより無之べくは候へども資金とて何ほどの事にても非ず心掛けさへあらば老父の考を實現してみる日も有之べし……

父は老來の溫和な氣持で、別にその事を强ひてもゐなければ、また私にそれが出來るかどうかも知らないやうな樣子である。私が心掛けても果してやれるかどうか私も知らない。しかし、私はやれるやうならやつて見たくない事はない。小さな木を植ゑるのだ。それがいつ林になり森になり、さて誰がそれを何の爲めに伐るやらこれも亦私は知らないが、ただ父の望みであるから、もし出來るなら植ゑて放つて置かうと思ふ。この考が私を妙に樂しくする。私はその理由を知らぬ。

ともかくも、私は一度そこへ行つて見て、父も言ふとほり弟のNとも相談して來よう。とい



ふと何か、私が家庭の子としてがらにもなく忠實なやうだが、何、また例の旅がしたくなつたのだ。野には夏草が茂つたらう。いつかも父がすすめてゐたが道のついでに、平泉——高館のあたり光堂でも見て來よう。またもう珍らしくもないがかへりがけには松島へもちよつと寄つてもいい。別だん、扶桑第一の好風とも思はないが、あそこは母との二度の曾遊によつて私のこころには親しい。——こんな走り書きを、それでも、有難いことに、その旅費の一半ぐらゐにはなる。

章美雪女士之墓

鄭が中國交渉署へ用事があるから一緒に行かうと言ふ。鄭の用事といふのは彼が僕と一緒に僕の案内者として臺灣の打狗から彼の故郷であるこの厦門の鼓浪嶼へ歸つて來たが、僕が臺灣へ歸る時に彼も一緒に再び臺灣へ行くには、中國交渉署か日本の領事館かどちらかで再び改めて渡航の許可を得なければならないさうだ。しかも日本の領事館だと早くとも二週間遲ければ一月以上もかかる。中國交渉署だと手數料を三圓とられる代りには二三日で用が足りる。だから中國交渉署へその渡船許可證を請求に行くのだ。——さう言つて、彼は小さな一時間寫眞のやうな寫眞を持つて居る。昨日寫して來たのださうである。

朝十時ごろだからそんなに暑くはない。

鼓浪嶼へ來てからもう一週間にもなるし、毎日そこらを散歩してゐるのだが、僕にはここの道はどうしてもわからない。何故かといふのに、ここの道は一筋として眞直(まつすぐ)なのは無いので、東へ行つてゐるつもりでゐると何時の間にか曲りくねつて西の方へ歩いてゐたり、つい目の前

に見えてゐる林木土の家へ行かうと思つて歩いて行くうちに道が妙にまがつてだんだんその家か遠ざかつて行つたりする。迷宮のやうな道である。だから中國交渉署へもどういふ風にどこを歩いて行つたか少しも覺えてゐない。

鐵の手すりのある石段を二十級ほど登つたら、そこに玄關があつて、そこが中國交渉署だつた。その玄關わきに小さな空地があつて、そこに白鷺が一羽金網のなかに養はれて、二三寸しかない淺い見るから生溫かさうな方四尺ぐらゐのセメントの池の中にしよんぼり立つてゐた。——厦門や鼓浪嶼のあるこの入江は昔から鷺江と言はれてゐるところなのだが、今はこの鳥をそれ程澤山は見かけない。却つて臺灣の方には群をなして飛んでゐるのを見かける。その代りこの鷺江には鷹などが居る。つい二三日前も南普陀を見物に行かうと舢舨に乘つた時、あの路頭に近い水中の巖の上で引潮の渦卷を物思はしげに見つめてゐる大きな鳥を見かけたから、何だと尋ねて見たら鄭は私の指した方をちらりと一目見たきり事もなげに〝howk〟と答へた。その答へぶりで私はその鳥がこの邊では決して珍らしい奴ぢやないことを知つた。

鷺を見て居るうちに鄭の用は直ぐ足りたと見えて、鄭は受付の方から出て來た。さうして又



二十級ほどの石段を下りる時に、彼は、

「序にそこらを散歩しよう。」

と言つた。

散歩などと云ふ氣候でもなければ、そんな時刻でもない——もうそろそろ日盛りになつて來るのに。この男は南國で育つただけに暑いのは平氣らしい。

「うん。涼しいところなら。」

私はさう答へた。さうしたら、鄭は默つて——一たい他國人が默つてゐる時の表情は氣心が知れない心持のするものだが——歩きつづけた。例のやうなわかりにくい道を少し辿つてゐると、いつの間にか道は、直ぐ海の上の切崖の上に沿うた樹木の澤山あるいかにも涼しい坂道に來てゐた。「厦門は地獄、鼓浪嶼は天國」と外國人がよく言ふさうだが、又、支那の沿岸では鼓浪嶼の景色が一番いいと人がよく言ふさうだが、この木蔭の道などは正しくこの評判にそむかないものである。木の間がくれに水の向うに浮んでゐる厦門の市街が烈しい日に照されて、この赤煉瓦造りの多い市街が青い水と對照をしてゐる。その水の上を小さな舢舨が澤山ゆつたり

と浮んで、厦門と鼓浪嶼とこの二つの島の間を行き來してゐる。涼しい風が吹いて來る。この道はあまり用のない道と見えて誰も通る人はない。私達は上衣を脱いで、歩いたり佇んで見たりした。前に行く鄭が上衣を着た。そこで私も上衣を着た。もうこれからさきは木かげの道ではなく日光の直射する所に相違ない。日光の直射するところでは上衣がないと却つて暑いからだ。上着を着ながら鄭が言ふ。

「この少しさきにクリスチヤンの墓地がある。行つて見ようか。」

「行かう。」

その木かげの板道を一つ大きく曲ると、もう樹はなくなつて禿山の頂であつた。さうして目の前に何百基かの石塔がまばらに立つてゐる。

石の豊富な地方だから、皆、立派な花崗岩であつた。「基督女徒蔡門車氏寢室」と書いたのがある。どんな人かと思つて墓の表を讀んで見ると「壽七旬」といふお婆さんのお墓で、その孫が石を立てたものであつた。「侍主復臨」といふやうな文句を刻んだものもある。さうして墓石の上の方には皆、金で彩つた十字が刻んである。鄭は、そんな墓石のなかを、例の氣心の知れ



ない表情を帶びた沈默で見まはして歩いてゐたが、つと、立ちとまつて、道の傍にあつた一基の墓標を指した。

「これはミスタア・ホワンの婚約してゐた娘の墓だ。」

「ミスター・ホワン？　誰だつたらうな、ミスタア・ホワンと言ふのは？」

「ミスタア・ホワンだ。僕の友達だ。君も知つてゐるではないか。」

さう言ふ。そこで私はポケットから懷中記事冊と萬年筆とを出して鄭に渡した。ホワンといふのはきつと支那人の姓であらうから、音ではわからないが文字を書いて貰へば解ると思つたからだ。鄭は僕の懷中記事冊の一頁へ「黄」と書いて見せた。それから「禎良」とすぐその「黄」の下へ書き加へた。

「ああ、わかつた。あの牧師の息子か。――この間一緒に散歩した……」

「然うだ。あの黄（ホワン）だ。この娘は大へん美しい娘だつた。この邊では少し上流の人たちは皆クリスチヤンだが、そのクリスチヤン仲間で第一の美しい娘だつた。――船遊びをしてゐて水に落ちて死んだのだ。さう、もう四五年前。」

「その娘は年は幾つだつた?」
さう言ひながら、私は丁寧に磨き込んで大理石のやうに輝いてゐるその墓の表を見た。鄭も同じやうに墓の表を見ながら、
「たしか十四か五だつたらう。」
「さうして、その時、ミスター黃(ホワン)はいくつだつた?」
「彼は今年二十二だから、その時は十七か八だつたらう。——彼は大へん悲しんだ。」
私と鄭とは炎天の下でこの墓を前にして、二人ともあまり上手ではない英語でこんな對話をした。私はたつた一度しか會つた事はないが、優しい美少年であまり口數を利かない黃禎良を思ひ浮べて、彼の甘い平靜に見える沈鬱は、四五年前のこの時の名殘ではなかつたかと、そんな風に考へた。さうして十七八の少年が十四になる許嫁を不意に失つて大へん悲しんだ——このおしやべりな鄭が「彼は大へん悲しんだ」と短かく言つた言葉が、私には雄辯に聽かれたが——といふその事實が、私に或るお伽噺のやうなあはれを感じさせた。それで私は、今のさつき鄭から受取つた私の懷中記事冊の新しい頁を開けて、墓標の文字と形とを寫した。この墓の



上には例に依つて型のとほり金で彩つた十字が刻まれてあつたが、その十字架のぐるりには、この墓に對する地上の人の地上の愛を示しでもするやうに特別な意匠で、細く組紐を曲げてつくり出したやうなシンメトリカルな線が飾られて、その外がはの上の方には金の星が五つやはりシンメトリカルに纏められてあつた。章美雪女士之墓と金を彩つて大きく刻んである。文字で金を彩つたのはこれだけである。その右の肩には「生」と書いて一九〇二年（どうしたのか私の手帳には年だけはあるが月日が書き洩してある。）その左の肩には「生」に對して「卒」と書いてその下に一九一六年七月三日とある。——ちやうど五年前の、今ごろだつたのだ、私は手帳に書きながらさう思つた。さうして生年月日の下に、それよりはやや外側にやや大きな字をもつて「女非死乃寢耳」と刻んである。それと對照する場所にはこの死んだのではなくてただ寢てゐるところの美しい少女の父の名が、この墓標を立てた人として記入されてあつた。
私は自分の懷中記事冊の一頁へ右のやうな文字をそれがある通りの位置に寫し終つて、ふとその墓石の根の方を見ると、何もない赤ちやけた土の上に、徑二寸もある大きな野茨の花が一つ、ほつかりと眞白く咲いてゐるのを見出した。木立はもとより雜草もあまりないこの墓地に

偶々この墓の近く、この野花を見ることが私の詩情を助けた。さうしてそれ故に、私は私の空想の世界のなかで韋美雪女士が本當に可憐な娘であつたことを認識した。

「この花は、支那では何といふ花だ?」

「さあ? 日本には無いか?」

と、鄭が反問する。

「いや、澤山ある。だがこんな大きなのはない。」

「何といふ花だか知らない。しかしその實はたしか野柿と言つて秋になると食べられる。」

鄭はそんな事を答へた。

私たちはその墓地から立ち去つて、あの木かげの道をたどつてから、再び見覺えのない道を私は鄭に從いて歩いた。この道も涼しい樹の多い道で、その兩側には、十分に庭園をとつた別莊のやうな屋敷が幾つか疎らに並んでゐた。さうしてやはりまがりくねつた少し上りになつた坂道であつた。その道の或る部分に突如として巨巖がそびえてゐた——この嶋、鼓浪嶼にはこんな風に立つてゐる巨巖が澤山ある。さうして、それぞれに皆名があるのだが——その巨巖の



麓に、それほど大きくはないが支那の様式と西歐の様式とを半々に巧にとり入れた一つのチャアミングな家屋があつた。私は立ちとまつてその家を眺めた。瞰青別墅といふ家である——家の前にさういふ額が掲げてあつた。さうして石の門にはその一本一本の柱に一句づつ次のやうな聯句が深く刻まれてあつた——

此地有人間寄傲

問天假我幾何年

それは巧な句であるかどうかを私は知らない。ただ、あの韋美雪女士之墓からここへ來るまでの間もの思ひをしてゐた私は、その對句をも私の懐中記事冊のなかに書きつけた。

# 街上小景

珍らしくかつと晴れた五月の或る日曜日の事。

この大都會の、中心からは外れてゐるが或る賑やかな通。

その通にある石造の高い建物は銀行である。

日曜日だから銀行は休みである。休みだから、鐵の大きな扉が頑丈に閉められてある。本日休業といふ小さな札もかかつてゐる。

その鐵の扉を背景にして、その本日休業の銀行の石段の上に三人の親子づれの乞食がゐる。

この光景は、神さまが畫家ドミエーと同じくゴヤとを相談役にした上で、三人して合作したのに違ひない――彼等の顔を見ろ。様子を見ろ。

乞食のおやぢは、一目見てもわかる盲人である。それが箏を彈いてゐるのだ。手箏とでもいふのか知らないが、普通の十三絃と同じもので、形だけがそれの五分の三ぐらゐに小さい。それを彈くのだ。すると女房が唄ふのだ。俺は音樂のことは何も知らないから言へないが、無論

あまり上品な曲でないことは、女房が唄ふ唄の文句でわかる。彈く者も唄ふ者も俺の耳にも上手とは思へない。藝が不運な身を助けるのではなくて、不運な身が藝を要求したのにちがひない。この小さな箏一つでも持つてゐればただの乞食とは違ふのだから、かうして恥を賣りながらも彼等の誇は傷かないかも知れない。――いや、喰へない者に誇はあるまい。ただ乞食を取締る役人に大目に見てもらへるからであらう。

おやぢは彈いてゐる。

おふくろは唄つてゐる。

おやぢは四十から五十五までの間だ。おふくろも四十から五十までの間だ。

面白いのはおやぢの顔だ。無智と親愛と野卑とを等分した混合酒（カクテル）だ。見えない目をあけて空の方を見上げながら手を動かしてゐる。

それよりも最も俺に面白かつたのはその子供だ。せいぜい四つだらう。三つかも知れない。それが尻を端折つて裸足でゐるのはいいが、どうしてだか腰に繩をつけられて、その繩をおふくろが曳いてゐる。――その事が何だかちよつと何かの象徴めいて感ぜられる。一たいどうし



たのであらう。彼等は自分たちの子供――か、それとも借りものの子供知からないが――を、猿にでも見立てて舞はせるのではないだらうか。正直に言ふが、そのことが俺にはかなり心配であつた。もしさうだとすると、俺は自分の情操を動かさなければならないだらうから。

この三人の乞食のまはりに群集がゐるが、誰も聞いてゐるのではないだらう。ただ見てゐるのであらう。それでも、演奏が一つすんだ時に銅貨を一枚投げたものがあつた。

「ヂヤン」

銅貨は石だたみの上で音をたてて一つ跳ねた。

――その時だ。子供をおふくろが繩で曳いてゐる理由が俺にもわかつた。おふくろは目が開いてゐるけれどもこれも盲目であるらしい。彼女は敷石の上で鳴つた銅貨を耳で知つた。さうして子供を曳いてゐる繩を引つぱつた。さういふ訓練がしてあつたものと見えて子供は、直ぐにその銅貨を目がけてよち／＼と歩き寄つてそれを拾ふと、おふくろとおやぢとの間にあつたおやぢの麥稈帽子のなかへ投げ込んだ。そのなかには幾枚かの同じものがあると見えて、そこでは金屬のかけら同士が觸れ合ふ音がした。

おふくろは自分のそばへ來た子供を小脇に抱くと、自分のふところの中をかさ〳〵させてゐたから俺は乳を呑ますのかと思つた。しかしおふくろは懐から大福餅を一つとり出した。それを半分に割ると指のさきへあんこをくつつけて子供になめさせてやつた。それから餅の皮を二つに引きちぎつてその一片を手さぐりで隣りにゐる夫の手に持たせた。男は大きな口をあけてそれを頬ばつた。女は、しかし、手で口もとをかくしながら食つた。

群集は今度はこの奇異な家族の團欒の場面を見物することになつた。俺は實際困つた。おれは正直に感動したものだらうか、それともこんなことぐらゐに欺かされてはならないのだらうか。それがどちらとも自分でわからないので俺は腹が立つて來た。

しかし、世の中には無論俺よりはまともな人間が澤山居る。現にその時も、それは或る中年の女であつたが、この光景を見て自分の懐へ手を入れると銅貨を一枚、石だたみの上へ鳴らせた。おふくろはきき耳をたてると急いで子供の肩を突いた。——これはあの紐を引つぱることと同じ意味なのだが、子供が手近だつたからさうしたのである。

子供は再びよち〳〵と歩き出て來た。さうしてきよときよととあの音を立てたもののありか



を突き止めようとしてやつと成功した。子供は身を屈した。その拍子に子供の股の下から何か落ちたものがあると思つたら、群集の一人が叫んだ——

「糞(くそ)だ！　糞だ！　おつかあ、糞をしたぞ」

中腰になつてうろたへてゐた子供は、その聲でおびやかされたやうに泣き叫び出した。なるほど子供は腹の工合でも惡いと見えて水つぽい糞をしてしまつてゐる。

おふくろは食ひかけてゐた二つめの大福を大いそぎで頬張ると、懐をさぐつた。それはあきらかに紙片を求めてゐたのだが、そんな贅澤なものの用意はないらしかつた。群集の一人はそれを認めた。さうしてどこからかそれを投げてやつた——

「さうら！　紙だよ」

紙はひらと舞ひ落ちた。しかし落ちる響はしなかつた。それを拾はうとした女の手さぐりの手はうつかり糞の方をつかみそうにした。——この女はにせ目くらではないらしい。

「そら、そら。そこは糞だよ！」

「もつと右。」

「もつと手前。」

口々にわめいて注意をするものがあつた。

やつと紙を拾ひ取ると母親は泣き叫んでゐる子供を一つ小突いてから、しかし母親らしく始末をしてやつた。子供はやつと泣きやんだ。だれか群集のなかにもうひとり折りたたんだ新聞紙を渡してやるものがあつて、おふくろは手にとるとそれをひろげて、子供の糞をつつみ取つたが、建物の壁を手さぐりに、その建物に沿うた路次のなかへ、それを捨てに行くらしい。

群集もやつと安心したといふ様子で始めてわつと笑ひ出した。その聲に怯えて子供はもう一度聲を上げて泣き出した。

それらの始終の間、おやぢは顏の表情一つ變へることなしに、さつきと全く同じやうに空の一方を見えない目で見上げながら、女が座を立つ時に彼に預けて行つた大福を貪り食つてゐた。

俺は笑ひつづける群集と泣き出した子供とをあとにして歩き出した。俺はどうにかしてせめては俺の空想でこの現實の氣持を救つて見たかつた。

俺は三町ほど歩いてゐるうちにやつと考へ出した。——あれは、あの一族は、ひよつとして



流竄の神々の一族ではないだらうか。それならばこそ神に特有の叡智を持つて、あの特別に奇異な服裝をして休業中の銀行の石段にしばらくの休息を敢てしたのではないだらうか。俺は自分の空想の根底が貧弱なのを考へた時にいやになつたが、その次にはやつと笑へる氣がした——といふのは假にあの時、あの童形の神が尻の間からさく〳〵と洩し出したものが敷石の上にこぼれ落ちる時に珊々と堆い金貨だつたら、あの群集の中にどんなどよめきが起つただらうか?…………そんなことを考へついた時に、俺の痩せつこけた頬ぺたが少しばかり笑ひといふものに近い表情で歪んだ。——ごく拙劣な笑ひであつた。

# オカアサン

その男はまるで仙人のやうに「神聖なうす汚なさ」を持つてゐました。指の爪がみんな七八分も延びてゐるのです。それがしきりとわたしに白孔雀の雛を買へとすすめるのですから、わたしはお伽噺みたやうなその夜の空氣がへんに氣に入つてしまつたのです。さうしてわたしはつひ一言そんな高價なものを買つてもいいやうなことを言つてしまつたのです。が、いいあんばいに先方の値とわたしの値とは倍以上も違つたものだから、まるでお話にも何もならずにしまつたのです。それでこの話はおぢやんになつたのですが、しかし小鳥屋の才取をするこの仙人は、わたしに鳥を賣りつけようといふ考は思ひきらなかつたものと見えます、一週ばかりして今度はわたしに鸚鵡を買へとすすめに來たのです。

仙人は初めこの鳥を持つて來て、これを紹介しました——十やそこらは完全に口を利く。それの發音は明確で微妙である。その上に何だかわからないが長いこと喋りもする。歌は「ハトポッポ、ハトポッポ」とそれだけしか歌へないけれども、その調子の自然なところが、この鳥の

有望なところだ。まだ三歳ぐらゐな若鳥だと思ふから仕込みさへすれば、童謠の一つぐらゐは完全に歌ふだらう。この鳥の名は「ロオラ」といふのだ……と、そこで「仙人」はわたしのうちの女中にビスケットを買つて來させて、それを鳥に見せながら言ふのです、

「ロオラや」

すると鸚鵡は體をくねらせてあのまるい大きな嘴を胸の方へ押しつけながら（それはしいなをつくつたやうな形で）

「ロオラや！」

それはわたしに三十四五ぐらゐな夫人の氣取つたつくり聲を思はせました。

鸚鵡は仙人の話によると雄だそうですが、わたしにはその聲と身振とのためにどうしても、女としか思へませんでした。大きなその鳥籠のぐるりを、金太郎（わたしのうちの狆の名です）はぐる〳〵とまはりながら吠えました。ロオラは相手のその狂暴には一向驚きもしないで、彼女自身も犬の吠える眞似をもつて應戰しました。金太郎が躍氣になつて籠に顔を押しつけるとロオラはいきなり最もグロテスクな嘴でそれに立向つたので、金太郎はびつくりして後退りを



しました。ロオラは金太郎の狼狽を見ると急に、

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」

と、笑ひ出しました。雄鷄がときをつくる時のやうに、上を見上げて意氣揚々としてダンスを踏みました。それから、くるりと下向きになりながら體のむきを變へ、また尾を扇のやうにひらいてダンスを踏み、また回轉しつづけるのです。

「ね、面白いでせう」

仙人が僕の目つきを見て、すかさずさういふ。

かういふわけで多少無理におしつけられた形でした。それになか〳〵高かつたのです。わたしは多少後悔しました。妻はわたしの感じを見抜いてしまつてゐて、わたしを例によつて調子にのつて煽てられたのだと甚だ不きげんなのです。しかし、わたしはそれの世話をした仙人を、見かけこそうす汚いが靈まで垢のついてゐる人物とは思はなかつたし、それにこの黄帽子インコといふ種類は、一般に質のいい鳥だといふ事も知つてゐたものですから、わたしは一日や半日ではまだ落膽しませんでした。かへつてわたしの今までの外の鳥の經驗で、いい鳥とは

つまり賢い鳥のこと、また彼等の賢いといふのは結局神經質といふことに外ならないのだからさういふ鳥こそは得て慣れるまでは、周圍の變化などのために一時啼かなくなつたりする例がよくある――いづれそのうちには面白くなつて來るだらうと自分で慰めてゐたのです。何しろロオラはわたしには馴染まない様子で、わたしが何を言はせようとしても少しも返答はしないのです。ただ時々、金太郎やジョオヂが吠える時、彼女も亦犬の聲を眞似るぐらゐなものでした。

次の日の朝、妻の話によると、ロオラはわたしが朝寢をしてゐるうちに、鷄の「ク、ク、クク、ククク」といふやうな聲と、それから人が鷄を呼ぶやうな「ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト」といふ叫びとを眞似たといふことでした。

「それから、まだ何かわからないことを言ひました」

と、おしげ（女中の名）が言ひます。

「わからぬ言葉つて、何か日本の言葉ではないのか」

「いいえ。日本の言葉ですの。『わたし……だわよ』といふのですけれど、その間が分りませんの」

「それに、オカアサン、オカアサンて呼んだぢやないの」

「え、そんなに申しましたね。少さな女の子のやうな聲でしたね」

「はつきり言ふかい」

「さうね。あんまりよくわからないわ」

妻とおしげとは朝の食事をしてゐるわたしに、交々そんな説明をするのでした。

食事を終つてわたしは林檎のきれを持つて二階へ上つて、食べものを示しながら骨を折つてやつと、

「ロオラや」

を言はせて、その日は一日わたしは外出してゐました。夕方歸つて來ると長谷川（書生の名）が

「お歸りなさいまし。――鸚鵡は、オタケサン、オタケサンとばかり言つてゐました」

と報告してゐました。

かういふ風にして家内中で、いろいろとロオラの動作や言葉などを注意してゐるうちに、ロ

オラが子供の泣き眞似をすることが、この上なくうまいことを皆は發見したのです。その外にロオラは割合たくさんな言葉を知つてゐることもわかりました。わたしは心覺えに、ロオラのいふ言葉を、一つ一つ書きとつて見たのです。

ロオラや。—

オカアサン——これは幾とほりにも言ひます。それぞれにあくせんとが違ひます。さうして甘つたれるやうな口調や、呼び立てるやうな口調や、また命令するやうな口調のもあります。オカアサンと呼んでから泣くこともあります。また三べんほど、さまざまに違つた調子でオカアサンと呼んでから、そのあとで笑ふことがあります。

ハトポツポ。ハトポツポ——これだけは上手に言ひます。ハトポツポ、ハトポと切つてしまふこともあります。ごく下手な口笛でこの童謠の調子を眞似ることもあります。

ロロや——これはどうも「ローラや」の訛りであります。最も幼い子供の聲であります。



オタケサン——

ボオヤ——

ア、ココニモアツタワヨ——

ア、アソコニモオチテヰルワヨ——

オバサン——

ソオネ——

ワタシオコルワヨ——

ワタシオトナシクマツテ(ナツテ?)ルワヨ——

これ等の言葉はみんな五つから八つぐらゐまでの女の子を思はせる口調であります。ア、といふ感嘆しを、その外の時にも時々叫びます。これ等の言葉は相當はつきりしてゐます。

トトヤ。ト、ト、ト、ト、ト、ト——鷄を呼ぶ聲です。或は子供におしつこをさせる時にお母さんが言ふ聲です。

クツ、クツク、ク、ク、ク、ク、ク——鷄が雛を或は雌を呼ぶ聲です。

ワン、ワン、ワン、ワン、ワン、ワン――犬、(小犬でせう)それの吠える聲です。

笑ひ聲。

それから、赤ん坊(といふよりも三つか四つぐらゐの子供)の泣き眞似。

又、出鱈目で調子はづれな歌。――これは相當長いこと歌ひ叫ぶのですけれども、意味はもとより音も調子も即興的で、到底促へることは出來ないのです。

(その他にもあるかも知れませんが、大たいは以上で盡きてゐます。)さうしてそれらのうちで何物にも優つて上手なのは子供の泣き眞似です。これは眞に迫つてゐます。事實、わたしは隣りの赤坊の泣き聲と、ロオラのそれとを區別することが出來ないことが、今でもあります。

ロオラはおしげが好きなやうです。おしげが二階に上りさへすれば、きつと物を叫ぶか、或は例の泣き聲を眞似ます。ロオラはわたしたち家族のなかではおしげを一ばん好いてゐる様子です。そのくせ別におしげが餌をやるわけではなく、餌はわたし自身や長谷川がやるのです。



それだのにロオラは一向、男には馴染まないのです。わたしの妻やおしげなどに對しては籠のそばへ頸をさし出して頭をさすらせることをするのに、男がさうしようとすると大てい逃げてしまひます。てんで籠のそばへ頸をさし出すことをさへしないのです。ロオラはこの通り少しも男に馴染んでゐないのは、きつと以前の飼ひ主は女だつたからでせう。

「ロオラヤ」

あの氣取つた聲の奥さんは、前の飼ひ主に相違ない。少し肥つたあごなどのくびれた人が努めてやさしげに言ふ聲に似てゐる。ロオラは女のうちでおしげをわたしの妻よりも好いてゐるが、わたしの妻は瘦せてゐて、おしげは太つてゐます。

それからロオラはまた近所の子供に談しかけられるのを何よりも喜んでゐます。彼等がわたしの二階の窓の下へ來て何か一言叫ぶと、ロオラはいろんなことを喋り出すのです――さうです。ロオラに、あとから〳〵さまざまなことを言はせたものは近所の子供たちでした。ロオラはきつと子供を相手に育つたに相違ないのです。これはロオラの話す片言交りの言葉によつても知れます。さう言へば男ぎらひのロオラは、男の聲を少しも言ふことはないのです。――ど

うも男のゐない家庭にゐたらしいと思へるのです。

犬の吠える聲や、そればかりか金太郎がロオラに挑戰する時にそれをあしらふ樣子などを見ると、ロオラは小犬とはもう十分に親しみがあるのです。多分は、ロオラの以前に飼はれた家にも小犬がゐたのです。

ロオラはまた鷄を呼ぶことを知つてゐるのです。また鷄の、ク、ク、ク、ク、クといふ聲も覺えてゐるのです。

鷄がゐて、小犬がゐて、三十四五ぐらゐの少し肥えた奧さんが子供をいくたりか育ててゐる――子供は? いくたりだらう。どこか東京近郊の靜かな場所で、さうしてその家庭には男はゐない。けれども賑やかな家庭である。ロオラは笑ふことを知つてゐる。よく笑ふ。調子はづれな聲で出鱈目を歌つては、はしやぐ。

「オカアサン」――O'kasan.

「オカアサン」――Oka'san.

「オカアサン」――Okasa'n.



「ホ、ホ、ホ、ホ」

かういふのを聞くとわたしは、三人の女の子がお母さんと一緒にロオラの眞鍮の籠を取圍んで、口々にいろ〳〵な呼び方の「オカアサン」をロオラに言はせてみんなして笑ひ興ずる緣側のありさまを、空想することが出來るのです。

――しかし、この家にはお母さんばかりゐてお父さんはゐない。お父さんはゐないけれども赤ん坊がゐるのです。――三つか精々四つぐらゐの「ボーヤ」で、それが時折、泣き出すのです……………

わたしがこのやうにロオラの先に養はれてゐた家庭を空想して、それによつてロオラを愛してゐる間に、わたしの妻はまたロオラの片言交りの言葉を、よく聞きわけたり、解釋したりすることを努力してゐるのでした。ロオラが同じ、「オカアサン」を言ふ時にも、甘つたれるやうなのや、少し不きげんなのや、またあごでこき使ふ調子を帶びたのや、さまざまな發音がある

と彼女はいふのです。子供の泣き眞似や、また出任せの歌などがひどく彼女を喜ばせました。さうして初めはそんな鳥などを買つた事に不平をこぼしたくせに、もうそんな事はすつかり忘れてしまつたらしいのです（――彼女、わたしの妻には子供がなかつたのです。時々それをさびしがるやうなことを言ふことがあります。）

要するにロオラのきれ〴〵な言葉はわたしには一つの家庭を思はせたし、わたしの妻には子供たちの生活を思はせたのです。

きげんのいいロオラが、大きな籠の中をグロテスクな足と嘴とで這ひまはり、籠の天井にぶらさがつたまま、

「ワタシ、オトナシクマツテルワヨ」

とさうやさしい女の子の聲で言ひ出した時には、不釣合な様子と言葉とがわたしを笑はせました。

わたしはロオラを愛して、いつも、懐くやうにと思つて、自分でものをくれてやるのです。ビスケットだの、林檎だの、バナナだの、甘納豆だのをロオラは好みます。さういふものをく



れてやつてゐるうちに、わたしはロオラの癖を一つ新らしく發見したのです。ロオラはわたしが手にまだものを持つてゐるうちは、たとひ彼女に與へてもそれを食べようとはせずに投げてしまつて、わたしの持つてゐる分を新らしく要求するのです。さうしてわたしが最後に與へたのをたべてしまふと、今度は自分がさつき捨てたのを籠の底へ下りて拾つて來てやつとそれを食べ初めるのです。――わたしは考へるのですが、ロオラは貰つたものをまだ食べきらないうちから次のものをくれようとする飼主を持つてゐたのです。これは明かに子供のすることで、また多分ひとりの子供ではなく二三人の子供が同時に鳥籠をとりまいて、われ勝ちにロオラにくれてやつたのでせう。

「ア、マダアルワヨ」

「ソコニモオチテヰルワヨ」

この言葉をロオラが覺えたのは、きつと、かういふ風に小さな飼主たちから食べ物を貰つた時のことでありませう。

一たいロオラの言葉は、たつた一つ「ロオラや」といふ時の外には、無理に敎へられたやう

な言葉は殆んどないので、それだけに自由でいきいきとした調子を帶びてゐるのです。だからわたしたちに餘計に空想をも與へるし、またそれを覺えたらうと思へる機會を想像させやすいのです。

「ロロや」

といふのは、これはやつとそれだけの言葉が言へるだけらしい幼い子供の調子です。これがきつと「ボーヤ」の聲なのでせう。「ボーヤ」は「オカアサン」に抱かれてロオラのそばへ來て「ロロや」をくり返したにちがひないのです。

ロオラは朝のうち早くと、午後の三時ごろとが一ばんきげんよく喋るのです。それは學校か幼稚園かへ行つてゐる子供たちが出かける前と歸つて來た時とにあたります。(――尤も、どの鳥でも朝と午後のこのころとはよく囀るものではあります。)その他にロオラは午後の九時か十時ごろ、誰か階段でも上つて行くとその足音をききつけて、

「オカーサン、ワーワーワーワー」

かう、急に泣き出すことが折々あります。小さい子が目をさまして母を呼ぶ聲にそつくりで



思はず、

「坊や、泣かないでもいいよ」

と言つてやらずにはゐられないほどです。

お母さんがゐて、子供たちがゐる。それも二三人、しかもやつと口をきけるほどの幼子までゐる。このお母さんはどうしたつて未亡人ではない。未亡人だとするとまだ新らしい未亡人だけれども、その人のものらしい賑やかな笑ひ聲や、また子供たちのはしやぎ方のなかには新らしく主人を失つた家らしい影は少しもないのです。それにもし主人を新らしく失つたといふだけなら、ロオラは、その主人の――男の聲をも少しは言つてもいいだらうし、その聲を話さないまでも、もう少し男に馴れてゐていいわけです。「ロオラや」といふ氣取つた聲をする夫人はきつと未亡人などではありますまい。但、その人の夫はきつとふだんは家にはゐない人なのです。

船員！　外國航路の高級船員の留守宅！　ふと思ひ浮んだ自分の直覺にわたしは非常に滿足

したのです。――その人はもう四十前後でなければならない。船長ではないかも知れないが、事務長ではあるかも知れない。ともかくも留守宅は有福に暮してゐるのです。子供たちはいつもおやつにはお菓子とくだものとを充分にいただいてゐる。ロオラはいつもおすそ分けに預かつてゐる。小犬と鷄と鸚鵡とにつれづれを慰められる子供と奥さんとは、いつも主人の歸りを待つてゐるのです。さうだ――

「ワタシ、オトナシクマツテルワヨ」――

子供たちはお父さんにさういふのです。お父さんによく言ふ言葉を子供たちはお友達の鸚鵡に教へたのです。

時たま歸る主人は子供たちを愛し奥さんを愛するのに忙がしいので、鸚鵡などは相手にしないのです。むしろ、主人が歸るとロオラはみんなから閑却されるのでせう。さうしてロオラは主人に馴れるひまもなく、また好まないのです。

またその主人が外國航路の船員だといふことになると、この鸚鵡が「オタケサン」といふ通り名の外に、ロオラといふ外國流の名前を持つてゐるわけもはつきりするのです。外國でさう



いふ名を持つてゐた鳥を主人自身が自分の船に乘せて、家庭への土産に持つて來たのです。

「ね、この鳥の名はロオラといふのだよ」

「おや、さうですか。可愛いわね、ロオラや」

その時、その夫と妻とはさういふ會話をしたことをわたしは考へることが出來るのです。それにしても「ロオラ」はまだ雛のうちに日本へつれられて來たのでせう。名前だけは外國風だけれども、ロオラは少しも外國の言葉は知らぬらしいのです。さうして「ロオラや」といふ調子さへすつかり日本風の發音なのです。

それにしてもロオラが、「ママ」と言はずに「オカアサン」と呼ぶところがわたしには此上なくうれしいのです。一體わたしは、近ごろのわが國のすこし程度の高い家庭で、父母のことを呼ばせて「パパ」「ママ」をもつてすることには非常に反對なのです。今までわれわれ文學者のなかにもわたしと同意見を發表した人がありましたが、わたしはそれらのうちの何人よりも以上に、もつと猛烈に反對なのです。――われわれ自身が幼いころに言ひなれたあのなつかしい「お父さん」「お母さん」といふ言葉をすてて、何を好んで、どんな理由があつて、その子供たち

に「パパ」「ママ」などと言はせなければならないのでせう。わたしには一向合點がいかない。言葉を捨てるといふことは心を捨てることなのです。わたしは幼いころにわたしが父母に持つたと同じこころを、わたしの子供たちにも持つてもらひたいのです——わたしにはひとりも子供はありませんが、若しあつたならば、パパ、ママの單純な口調を喜ぶとならば、わたしは一そトト、カカと呼ばせる方がいいとさへ思ふのです。わたしはセンチメンタリストかも知れません。しかし人間がいいセンチメントをも持つてゐることが何で不都合なのです。子供たちがその生涯の最初の機會に最も感動して叫び、さうしてそれ故一生涯最も深い印象を持つ筈の第一の言葉を、外國の言葉で叫ぶなどといふことは全く許し難い事だとさへわたしは言ひたいのです。臺灣では臺灣籍民の子供たちに小學校內で土語を使ふことを嚴禁し、時にはこれを犯したものに鞭を與へた事實さへあつたといふのに、それほど國民と國語との權威を知つてゐる爲政者なら、何故、今日中流以上の日本人の子供たちがパパ、ママと呼ぶことを嚴禁し處罰しないのでせう——とさへわたしは思ふのです。

わたしはロオラがいい子供たちのいい言葉を覺えて、「オカアサン」といふ言葉を、しかも幾



とほりにも感情をこめて呼ぶのがうれしいのです。さうして夫は外國船の船員であつて自然と外國風の空氣も多かりさうに思へるのに、その奧さんが子供たちに自分のことを「お母さん」と呼ばせてゐる事を思ひ浮べて、この奧さんとその家庭とをかゆかしいと感ずるのです。

毎日聞いてゐると、ロオラは赤ん坊の眞似をすることが一番好きなやうでもあり、上手でもあります。泣き眞似でも、片言の出まかせの歌でも、ロオラはきつと、外の子供たちよりも赤ん坊と一緒にゐる時間が多かつたからでせう。外の子供はもう大きくなつてゐるから、前にも言つたとほり學校などへ行つてゐて、家庭には一日の半分しかゐないのでせう、……

かうして二週間ばかり經つてゐるうちに、例の小鳥屋の才取りをする仙人がまたわたしのところへ訪ねて來ました。今度は青い白鳥の雛を買はないかといふのでした。その美しい名の鳥はどんなのだとたづねると、仙人もよく知らないらしい。何しろ雛だからよくわからないが青い白鳥はありさうにもない。ブリユーといふのはどうも灰色のことでブリユースワンといふの

はひよつとするとただの鵠らしいのです。たとへまあどんな珍らしい鳥であつても、わたしもさうさう鳥ばかり買つてはゐられないのですから、その話にはあまりとり合はなかつたのです。

「前の鳥は、どうだつたかね」

仙人はわたしが前の鳥――つまりロオラに滿足してゐないと思つたのかも知れません。

「ロオラか。あれは面白い鳥だよ」

「よく喋る？」

「うん。いろんなことを言ふ」

「それはいい」

「だが、とりとめのあることは言はない。また片言ばかりだ――言葉はどうもよくわからないが、それは鳥の罪ではなくて、先生の罪らしいのだ。赤ん坊の言葉をおぼえたのだね。だから意味はわからないが情緒はなかなかあるよ」

そこでわたしはロオラに對するわたしの觀察と空想とを、仙人に話して聞かせて、ロオラが



わたしには目には見えないが心にははつきりわかる一家族を隣人にしてくれ、またわたしの妻にはいくたりかの子供たちを思はせて彼女の母性を滿足させてゐることを說明したのです。

「敎へ込まれたのではなく、自然にひとりでいろんな事を覺える鳥だとすると、いい鳥だよ。賢い鳥だよ。それにその家庭で相當長く、少くとも三四年はゐただらうな。それで何かね、泣いたり笑つたりする時には多少、そんな感情を鳥も持つてゐてそれを現はすか知ら」

「さ、さういふ點まではわからないが」わたしは仙人の問に對してかう答へたのです「しかし、聞く方は、ともかくもさういふ感情をさそはれて聞くね――ところで、君、あれは、ロオラは今まで時々鳥屋の店にさらされた鳥ではあるまいね」

「それはそんなことはないさ。さう、そ。あなたに言はうと思つて忘れてゐたのだけれど、あれの爪や嘴があんまり延びすぎてゐる。あれは何か木片かなんかを嚙らせるがいい――それを見てもわかるが、大切にも育てられたがあんまり手入れはとどかなかつたね、あの鳥は。つまりあなたが言ふやうに、女と子供との家庭に育つたからだ。それに鳥屋の店にはさらさなかつた證據だね、鳥屋で半月もゐたことがあるとすれば、鳥屋は注意をしてあの嘴を蠟燭でも燒

いてやるよ、あんまり延びすぎてゐるものね」
「君の爪も」とわたしは笑ひながら言つた「一つ蠟燭ででも燒いてはどうだ」
「これは延びてゐちやいかんね」仙人は仙人らしいとぼけた顏をして、煙草をつまんだ彼の手の指を見つめてゐました。
とわたしは自分の常談を打きつて、わたしの日ごろの空想のつゞきを、仙人に話しつゞけたのです――

最後にのこつてゐる疑ひは、つまりあのやうな可愛いいまたよく慣れ親しんだロオラを、何故、お母さんが鳥屋へ賣つてしまつたらうかといふ點なのです。仙人に聞くと、賣つたのではなく外の鳥と取代へたのださうです。それならば尙の事、別にすべての鳥に飽きたいといふのでもなく、また金に代へる必要があつたわけでもない事になります。さうしてわたしの想像は一さう確實性を持てることになるのです。
わたしは考へるのです。わたしの空想の夫人はきつと、可愛いい子供を失つたのです。それ



は「ボーヤ」にちがひないのです。ロオラが夜など突然、寢ぼけたやうな聲を張り上げて――
「オカアサン。ワーワーワー」
と、泣く時、夫人は失はれたいとし子の思ひ出に堪へられなかつたに相違ありません。これより外に、その夫人が良人のいい土産でありその上彼女の可愛い小さな娘たちのいい友達を人手に渡さうなどと思ひ立つ理由をわたしは思ひ究めることが出來ないのです。さうして、ロオラのあの本當の赤ん坊そつくりな泣き聲を聞けば、これはきつと誰しもわたしのとほりに考へるでせう。
わたしは自分の想像を信じるのです。さうしてせめてはさびしい夫人が良人の留守の間に子供を死なせたのでなければいいがと案じてゐるのです。
ロオラはわたしの家に來てからもう二月になります。さうして彼女は（わたしにはロオラはどうしても女の子とより外に感ぜられませんが）わたしが金太郎やジョオヂを呼ぶ時の口笛を上手に眞似るやうになりました。わたしはロオラを愛してゐます。さうしてロオラも追々とわ

たしになついて來ます。ただわたしが時々心配することは、ロオラが完全にわたしたちの家庭になついた頃には、わたしの家には子供がゐないのだから、ロオラは子供の眞似を忘れてしまひ、しかもそのころになつてわたしの想像する寂しい夫人は、年月とともに愛兒を失つた眞實の悲しみが少しづつうすらぐとともに、せめてはその兒のなつかしい追憶のために、その子の聲に生きうつしのロオラに逢ひたいと思ひはしないだらうかといふことです。



# 戀人

次のやうな手紙があると言つて、或る友人が私にそれを示した。

---

突然の手紙に、君はさぞ驚くであらう。

ただ旅に出るとだけ書いたはがきを君に上げた日からもう半年以上になる。その間の僕の消息に就ては、恐らく君は外の人同様に何も知るまい。もつと一般に知れ渡るかと懼れたことがつい世に知れずにすむのは僕たち――とかう複數で言つてもわからないか知れないがもう少し讀んでくれたまへ――僕たちの爲めには幸福なことであつた。實は君にだけならばもつと早く知らせたかつた。しかし、僕がさうしなかつたのは、たとひどんな事情ででも君に嘘をつかせたくなかつたからだ。といふのはもし、この出來事を君が知つてゐたら、君がもし人から僕のことを聞かれた時に、それを知つてゐながら知らないと言はなければならなかつたらう。それにまたこの事は、君が人に嘘をつきながらも知つてゐなければならないといふほどの事でもな

かつたのだ。僕としても君には知つてゐてもらひたいやうでもあつたが、又誰にも知られないでゐる方が、この幸福がもつと深められるやうな氣もしたし、僕はつい君に默つてしまつてゐた。だが、今はもう君に何もかも言つてしまつて、それから君に迷惑なことを賴まうと思ふ。
――それからこれはいくらか長い手紙にはなるかも知れないが大して心配なことではないのだよ。

　僕のくせで獨合點の、それに頭が混亂してゐるので、妙な書き出しをしてしまつたが、一口に言つてしまふと、君にあのはがきを上げた晩僕は女をつれて東京を逃げて來たのだ――さういふと僕が女をそそのかして連れ出しでもしたやうに聞えるかも知れないが、さうではない。女は第一に年齢から言つても、その外のどんな點から見ても僕よりは立場がすぐれてゐるのだ。
――僕が彼女に就てもし多少の不滿を抱くやうなことがこのさきあるとしたら、それは彼女があまりに全く僕より優れすぎてゐるといふ點であるかも知れない。ただ優劣のない點といへば、たつた一つ、僕達が互に愛し合つてゐるその程度だけだ。で、東京を逃げ出したことに就ても僕が女に誘はれたのだ。喜んで誘ひ出されたのだ。事情がさうさせないではゐなかつたのだ。



僕が一緒でなかつたら、恐らくは彼女一人ででも、それを實行したのだから。それを實行しないではならなくなつた時に僕も始めて聞いたことだが、彼女はその事をもう一ケ月も前から、彼女に本當の同情を寄せてくれた或る女中とそれから從妹とも相談をした上でちやんと計畫して置いたのださうで、僕に言はなかつたのは僕の氣の弱さを彼女が心配したからださうである。僕は氣が弱いのぢやない――ただ彼女のことを考へて氣が弱かつただけだ。だから彼女がさう決心をしてゐる以上、僕にはもう何も考へることはない。僕はすぐにもさう決心をしてしまつた。彼女は僕が即座にさう決心したのを大へんに喜んでくれた。もつと喜んだものは僕自身であつた。實際、彼女はもうその地位やら名譽やら財産やら何もかもすつかり捨てて來たのだ――事實、多少のそんなものを持つた女ではあつたのだ。彼女が捨てたものに對して僕の抛つものがあまり尠いのを僕は歎かはしく思つた程だ。話題の好きな、さうしてどんな事柄でも下等に解釋しないでは、滿足の出來ないこの社會では、彼女が一介の書生たる僕のために出奔したといふことをきつと、この上なく面白い話の種にしたらうと思ふが、それが然うならなかつたらしいのは、家名を無上に尊重する彼女の一族と――と言つても別に血族でもない一族と、

さうして彼女の出奔に就て或る利益とを得られる人々とが、そこを巧に取計らつたからに相違ない。それには無論、家出の時に彼女が殘して來たといふ手紙のなかに、「自分の方からはどんな意味ででも決してこれ以上に所謂家名を世間へ出すやうなことはしないから騷がなくともいい」といふ意味を書いて來たさうだから、それを信じて安心してゐるのであらうが、全く家名にさへ傷にならなければ彼女は、彼女の家からは無い方がいいぐらゐに思はれてゐるに違ひない。――私はついでのこともつと具體的に書いてしまひたいやうな氣もするが、要もない事で人をこれ以上に惡くいふのは止さう。私にとつては、彼女が家族から本當の意味で愛されてゐないといふことがつまりは幸でさへあるのだから。でなかつたら彼女自身でももつと家庭を自分のかせとして感ずるだらうのに――こんなことを書き立てるのは初めからちつとも必要ではなかつたかも知れないが、書いてしまつたからこのままにして置く。實はこの手紙は今までにももう三四へんも書きかへたのだから。

　僕がただ君に知つてもらひ度いのは、私が彼女と東京を遁走して來たことに就ては今に少しも後悔してゐないといふ心持と、それにもう一つ、それだのに僕がこんなにひどく困窮してゐ



るといふ事實とである。殊にその後のものが、僕をして君にこれを書かせる動機である。

僕たちは、もう三月ほど前に金をつかひ果してしまつたのだ。もとより僕には初めから金はなかつた。で、彼女はといふと一ケ月も前からそろ〱遁走の計畫を立ててゐたとは言ひながら、をかしいほど金の用意だけはしてゐなかつたのだ。そのくせ身のまはりのものはおもちや見たやうなものまで持つて來てゐるのである。無論斷るまでもないが、僕はそれに就て彼女を非難するやうなさもしい根性のないことは君が知つてくれるだらう。それどころか、僕は女のそのやうな世間見ずを、敢ていふが、可愛いいもののやうに思つてゐるくらゐだ。さうして僕は自分に何も働きがなくて彼女にこんな心配をさせなければならないことを、自分ながら腑甲斐ない事に思つてゐる。――が、そんなことを思つて見たとて何の足しにならう。いくら僕だつて東京ならまだしも何か仕事の口でもあるやうな氣もする。だがここでは全くもうどうにもならないのだ。だから僕たちは都合さへ出來るやうなら、せめては大阪まで出ようと今もさう相談をしたところだ。

　一たい、僕たちは東京を出ると何といふことなしにこの古い港の市街を指して來たのだ。別

にどうしてここへ來たといふ理由もない。ただ東京から出來るだけ遠い町といふつもりが自然とここへ來てしまつたのだ。——今の場合呑氣なことをいふやうだか、金さへあつたら(！)この古い市街は彼女と一緒に一生をここで住み朽ちてしまふのにどんなにいいだらう！　——ここへ僕たちが來た最初の日、去年のまだ初夏のころであつたが僕はほんとうにそんな氣がしたのだ。で、ふたりでそこらを見物してゐるうちに、僕はふと山に近いさびしい道ばたの家に貸間ありといふ張紙を發見したのだ。さうして僕たちは、僕の發議でそこの一間を借りることにした。それが今僕がこの手紙を書いてゐるこの部屋なのだ。二間ある二階の一室で、僕がゐた東京のあの部屋よりは確にいくらかいい。ここの家族といふのは五十ぐらゐの婆さんとそれに十三になるといふ女の兒とふたりきりだ。この家には下にも家族の部屋の外に三室ぐらゐあるので、婆さんはその女の兒を相手に素人宿をしてゐるので、それも水夫よりはいくらか增しな程度の外國通ひの船員がその上陸の間を一週間とか十日とか宿をとるのを目當にして商賣をしてゐる家であつた。それからこの家には月に二へんか三べんづつぐらゐ二十三四の藝者風の女が來る。僕は初めそれを船員相手に稼ぎにでもくるのかと思つてゐたがさうでもなく、これは



この家の娘らしい。

それはどうでもいいとして、僕たちはさつきも言ふとほり三月ほど前から下宿料を拂はないでゐるのだ。去年の十月に渡したきりだ。十一月の月末に私が支拂ひを待つてくれるように賴んだとき、婆さんは少しもいやな顏をせずに承知した。多分、僕たちの荷物のかさや、僕の女の身なりなどを値踏みしてみて五十圓や六十圓金のなら——僕たちはふたりで五十五圓でゐるのだ。土地としては相應に貪られてゐるやうだ——取立てるにさほど心配はないと見てとつたのであらう。事實、年の暮になつて市中が賑やかになつたので、或る晩、僕たちがふたりづれで散歩に出たあと、歸つた時に婆さんがうろたへた樣子で二階から下りて來たと思つたら、カギをしないで置いたトランクの中などをまぜ返して見たらしい形跡があつた。十二月にも僕は支拂はなかつた。今度は別に斷りもしなかつた。さう度々言ひ出すのもいやだし、先方から言ひ出すのを待つてゐたのだ。ところが別に何も言ひ出さなかつた。僕たちは無論それを氣にしないではない。こんな場合、炭が無くなつた時は一番みじめだ——これやひよつとすると君も下宿で覺えがあるだらう。だが僕の女はそんなことを案外苦にしないのでまだしも助かる。そ

れにしても金の工面の方法はないのだ。僕たちが今、手紙の往復をしてゐるのは彼女の従妹ひとりだけだ。この人とてもまだ僕たちぐらゐの年ごろのお孃さんだから十圓二十圓の小遣ぐ、ゐどうにかしてくれるにしても――實際こちらから言つてやつたわけでもないが、今までにも三度ばかり十五圓ほどづつ送つてくれたことがある。きつと自分の小使を貯めて置いて分けてくれたのだ。その些少な金がどんなに有難かつたか！　そんなふうに時々ともかくも書留などがくるので婆さんはそのなか身も知らずに案外僕たちを信用してゐるのではないだらうか。――で、せいぜい二十圓までぐらゐなら、その方へたのんでもどうにかなるだらうが、それ以上はもうどうにもならないだらう。――そんなことを言つてゐるうちに年も暮れ、お正月も來てしまつて昨日になつたのだ。

婆さんが二階へ上つて來たのはおひる御飯が濟んで間もなかつた。ちよつとお顏をといふので僕を隣の部屋まで呼出したのだ――ちやうどそこは年の暮から人がゐなかつたものだから。勿論、婆さんは催促に來たのだ――松の內が明けないうちからでは悪いと思つて遠慮してゐてくれたのださうである。それから言ふのは、二三ヶ月ぐらゐ待つのは場合によつては何でもな



いが、去年のことはともかくも型をつけて貰ひたいとの意味であつた。それから僕が何と返事をしようかと窮してゐるのを見てとつて婆さんが疊みかけて言ふには――それなら、一時のことに何か品物でも借りたい。さうすれば、それを知り合ひ、といふほどでもないが顏ぐらゐは知つてゐる質屋へ持つて行つて、融通を賴むといふのである。僕は考へてから、仕方がなければさうしようと答へた。それにしても僕のものと言つては、時計ぐらゐよりは無いし、それに夏物を皆加へて見たところで四十圓もおぼつかないであらう。これはどうしても彼女に相談しなければならない。僕は立上つて自分の部屋へ行かうとすると、彼女の影がさしてゐて、彼女は障子の外で今までの話を聞いてゐたらしかつた。さうして私の顏を見るなり彼女は面白さうに笑ひ出して、自分の手を差出して見せた。彼女は寧ろそんなことに子供が珍らしいことを喜ぶやうに打興じてゐるらしかつた。彼女が手を差出したのは、指輪はどうだといふつもりらしかつた。しかし、彼女がせつかく拔いた指輪やら時計などは、婆さんの意見では質ぐさとして好もしいものではなかつた。石がどんなに立派でも機械がどんなによくとも田舍の質屋はそれを相當に値踏することを知らない。それよりも「奥樣のお召物」か何かと婆さんは言つた。さ

うして結局、「奥様のお召物」を夏のもの三四枚に冬のもの一そろひ――それは皆「失禮ですが」と言ひながら婆さんがあれこれと撰び出したものだ。僕はろくでもないものだけれども自分のものを先づ無くしたかつた。けれども僕の女がそれを承知しなかつたし、婆さんも相手にしなかつた。それは今ふいと思ひついたことだが、「奥様のお召物」を僕たちが流質してしまつたとしたら――今のままではどうしたつてさうならざるを得ないのだが――もしや婆さんの藝者をしてゐる娘がそれを受出すかも知れなかつたらう。

質草がきまると婆さんは僕にも同道して欲しいやうな口ぶりであつた。僕がきつぱり斷つてしまへば無理にとは言はなかつたらう。さうしてつまりは君にこんな手紙を書かずとも濟んだであらう。ところがその時、僕も婆さんに從いて行くつもりになつた。といふのは僕は質屋のおやぢと顔馴染になつて置きたかつた。さうして今度金につまつた時には誰にも相談をせずに自分の品物を無くしてしまひたかつたからだ。

僕は婆さんに從いて坂になつた山手の道を上つて行つた。雪が降つてゐるのだよ。この二三日降りつづけなのだ――こんな南國でこんなに雪が降つて積らうとは思ひがけないだらう。五



すぐらゐは積つてゐる。尤も例年のことではないさうだ。

僕等の這入つて行つた質屋といふのは色町の近所であつた。婆さんの話では遊廓もあれば藝者屋の一廓もやはりここださうだ。別に聞きもしなかつたが婆さんの娘もいづれはこの近くに居るのであらう。店の中へ這つて行つた時に僕はその繁昌の狀態に先づびつくりした。奥へ細長い部屋のそのあまり廣くもない土間には、ほの暗いなかに先客が六七人も居た。婆さんはそのなかの大ていの人を知つてゐると見えて、何か知ら口を利いた。その爲めに、皆が僕の方へ一層注意をして僕をじろじろと見つめるのだ。その連中はどうやら大てい色町の女中やら雜用などをしてゐるやうな風俗に思へたが、僕はあまりけげんさうに顔を見られるので、ふと目をそらして店の帳場の方を見た。

僕は何でもないものを見るつもりでゐた。それだのに僕の見たものはへんな光景であつた。といふのは、その質屋の主人といふのが、君、よほど目の惡い人なのだ。それが實に丹念に一つ一つの質草の目利きをしてゐるのだ、あんまり念入りに手間がとるために客がこんなにつかへてゐるのぢやないかと思へる。張場にゐるのは主人ひとりではない。外にも中年の番頭がも

うひとりゐる。これはもとより眼が見えるのだ。それだのにの眼見える番頭が、主人が不自由な眼で目利きするのを、そのそばでぼんやり見てゐる。不思議ではないか。尤も時々主人は小聲でまるでひとりごとか何かのやうに番頭に相談をするのだ。番頭はただ主人の通譯でもあるやうに、客と値段の折合ひをつけるだけだ。主人といふのは四十格好の痩せこけた蒼白い男だ。それにしてもよほど疑ひ深い男で番頭が見たのだけでは信用しないのかも知れない。それとも番頭がついこの間何か客とぐるになつて、主人に損をかけたことでもあるのかも知れない。だから、主人はそんな不自由な視力で嚴密な吟味をするのだ——と、さう僕は思つてゐた……

それにしてもその主人といふのは盲人なのぢやないか知ら。少くともそれに近いだらう。顏をぐつと品物に押しつけるやうに近づけて、品物を手で何度も撫でて見てゐるのだ。その男の手の下にあるものは女の色變りの紋附だ。藝者のものであらう。見ると、その外にもそんな種類の著物が主人の片脇に幾組か積み並べられてある。幾組かの使がそれぞれに、藝者の松の内の衣裳をそつくりそのまま質入れに來てゐるのぢやないだらうか。著物が一枚濟んでその男はその次のものを一枚とつた。それを取上げてひろげる時、それは目の覺めるやうな、このうす



暗い部屋のなかをパツと明るくしたやうな緋縮緬の長襦袢だつた。

それが著物であるうちはまだよかつたのだ。緋縮緬の長襦袢をひろげた上へ押かぶさるやうにその顏をその男が持つて行つた時には、僕はその男がうつかり香を嗅いでゐるのぢやないかといふやうなへんな氣がしたのだ。さうして赤い布の上を——襦袢の衽やら褄やら。そんなところを、長い神經質的な指で撫でつづけてゐるのを見ながら、僕はふと自分の持つて來た質草のことを思ひ出した——僕もやつぱり女の長襦袢をしかも夏のもの冬のもの合せて三枚も持つて來てゐるのだ。なかでも一枚は派手すぎるから早く著てしまはなければと言つて彼女がついこの間まで、よく身につけてゐたものだ。それらのものがこの男に嗅がれたり撫でられたりするのぢや、まるで彼女の肌そのものがこの男にさすられるやうなものだ。僕はそんなあたじけない氣がした。僕はその男がそんなことをしてゐる表情を見てやらうと思つた。僕はその男が何だかうすら笑ひで頰をひきつらせてゐるのぢやないかとさへ思つたから。でもその男はすつかりうつ向いてもゐたし、それにその場所は大へん暗かつたから、とても表情などは見えさうにもなかつた。——僕はふと、この男は視力が鈍いのぢやない、全くの盲目ぢやないかと考へ

た。といふのはもしこの男にまだいくらかの視力でも殘つてゐて、それをおほつかないたよりに目利きをするなら、この男は何故、そんな店の奥のうす暗いところなどにわざわざ居るのだらう、もう冬の三時ではあるし、それに雪空で暗いし、けれども窓の障子に近いところなら雪の反射でそれほどは暗くないといふ妙な光線だ。事實、番頭は窓のすぐそばに、明るいところに坐つてゐる。主人はずつと奥にゐるのだ。僕がそんなことを思つてゐるうちに、長襦袢ももう濟んだらしい。主人はそれをさつきの著物と外に羽織のやうなものなどを一くるみにするとそれを番頭の方へ押しやつた。それから番頭はそれらのつくねられた品物を疊み直しながら、客の要求に應じてゐるらしかつた。その時にあの妙な主人は、新しい品物を手にとつた。しかしそれに手を觸れたかと思ふと、一種つまらないものを投げ出すやうな素早さで番頭の方へ片手で掃きやつた。そのとたんにその男は、何氣なく番頭の方を振り向いたが、明るい方に面した瞬間にこの男の目は兩方とも果して、たしかにつぶれてゐた。僕はそれを見た。

　その男が番頭の方へ押しやつた品物は、それは男物の黒紋附と著物とだつた。主人は女ものの値踏みはしても男物の値踏みはしないらしいのだ。もうくどくどとは書かないが、その主人



がもう一度、藝者の別の著物をとり上げ別の長襦袢をひろげた時には、僕はもううつり香を嗅いでゐるといふやうな上品な言葉では考へなかつた。小鼻を動かしてゐる或る犬のことを想像した。さうして僕は、僕と宿の婆さんとの間に置いてあつた大きな包を自分の小脇に取り上げるなり、宿の婆さんに言つた――

「婆さん。僕はね、今思ひ出したが何もこんなことをしなくつても、もう一週間もすれば金は出來るのです。その間ぐらゐは待つてくれるでせう」

　僕の唐突な言葉に婆さんは直ぐには何とも答へなかつた。僕は婆さんの返事などは別に聞かうともしないで、自分から先きに立つて格子戸を開けるとつとつと店を出てしまつた。僕のそぶりはきつといくらか氣違ひじみてゐたらう。

　婆さんはその歸り途でも別に何とも言ひはしなかつた。その不審と不服とをこの無言で僕に言ひ現はしてゐるのだ。僕と婆さんとは氣まづく早足にさつきの途を歸つて來た。

　僕はあの店で婆さんにあんなことを言つたが、無論、一週間の間に金が出來るなどとそんな方法があらう筈もない。ただ何でもいいからあの質屋から出たかつたのだ。さうして婆さんに

賴んで別の質屋へ行かうと思つたのだ。しかし、氣まづくなつてしまつては、僕は今更改めてそんなことを言ひ出すことも出來なかつたし、第一あの質屋がいけなくつて外の質屋でなければならない僕の氣持などは、どんなに說明してみたところでこの婆さんには判りつこもないだらうが、それよりもてんで今になつてみると僕も婆さんにそんなことを說明するのさへ恥かしい氣持だ。僕が君にたのみたいといふのはここの事だ。

僕は考へた上で、外に仕方がないから君には迷惑でも、例の女のものを六點とそれに僕のものを一切——といつても御覽のとほり何ほどもないが、ともかくもそれをこつそりと小包にして、この手紙と一緖に君のところへ送る。僕は百八十圓ほど欲しいのだ。ここの支拂ひと大阪までの旅費とだ。それだけの金を、君がその小包の品物でどうにか僕の爲めに奔走してはくれないだらうか、小包がとどき次第なるべく早く、どこかの質屋へでもたたき込んでくれないか。東京で——僕の目のとどかないところでなら、たとひだれが匂を嗅いで見ようが、撫でて見ようが、乃至は舐めて見ようがそれは仕方がないよ——これは冗談だが。

今まで何も打明けもしないで困つた時にだけ不意に、勝手なことを賴むのを、友達甲斐に宥



してくれたまへ……

---

一わたり讀んでしまふと、私はその手紙を封筒のなかへ納めながら、それをうらがへして確めて見ながら、ひとり言に云つた——

「長崎に居るのだな……」

それから私にそれを見せた友達を相手にたづねた——

「この手紙の主はまだ若いのだね」

「えさうです」と私の年少の友人は答へた「私の中學時代の同窓ですから」

「さうだらう。でなけや、こんな熱情を持てるものぢやない。それにしても女の方も年上とは書いてあるが、まあせいぜい一つ二つの上だらうな。二十三四といふところだ。面白いな。——で何かい。その小包はもうとどいたの?」

「え。今のさつき來たのです。實はその事であなたのところへ來たのですが、あなたは質屋を——そんなものは御存知ないでせうね?」

「どうして！　僕だつて質屋ぐらゐは御存知だとも」

「さうですか。私も知つたところはあるにはありますよ」私の年若な友達は言つた「でも、私の知つてゐるのは、私が時々洗ひざらしの飛白(かすり)やらよれ〳〵の袴などを持ち込むうちなのです。六七枚で百五十圓にもなるやうなそんな質草を持ち込むには、わけを言はなけやなりませんよ。いゝ口實もないのです」

「それやさうだらう」私は言はつた「だが僕の所だつてそんななまめいた質草は柄にないな。……それぢや、それより一そかうしたらどうだらうな――その手紙を小説にして賣るのだぜ。なに、小説になるとも。何だつて小説になるぜ、近ごろぢや。それにその手紙は私には面白いよ」

「質屋のめくらの主人がですか？」

「主人も主人だが、手紙全體がだ。讀んでゐると甘美な悲しみを感ずるよ――さういふふたりが、これからさきどうなるだらうなどと要もないことなど思はせるね。戀人たちに祝福あれと言ひたい氣になる」



「それにしても、どうしたら賣れるでせう」

「なに、その前後へ僅か五六枚書き足す。手紙もそつくりではいけない――前半などはもつと抽象的にする。迷惑な人が出ないために。それから原稿には僕が署名をする。賣つてその手紙に當る枚數だけの稿料を送つてやつたらどうだらう。――あとさきに僕が書き加へたところは僕が貰ふさ。誰も腹のいたむ者はない。――その代り、あれだよ。僕が手紙を直したら、君はそれを原稿紙へ筆耕したまへ」

「そんなことぐらゐならしますとも」

そんな會話の末に私は言つた。

「その小包をまだ開けて見ないといふなら、ちやうどいいから、その封は切らないで表書きだけ張りかへて送りかへしてやりたまへ。尤も私もそれを明けて見たくないことはない。それを見たら、この手紙のなかでは別に何とも書いてゐないその女のことを、その美しさを僕ははつきり空想できるのだがなあ」

「それぢや持つて來ませう。その小包を」

私は笑ひながら答へた。「よさう。うつり香を嗅ぎたくなると悪いから。その代り、小説のなかには美しい女のことなどは知らん顔をしてゐよう。」



# 發見

A君が私をカフェーに行かないかと誘つたのだ。
A君とはもうながい間、同じ社で、毎日椅子を隣り合つてゐるのだが、かういふことは滅多にない。そこで――私はその時ふとおもひ出した。――つい昨日のことだ。もう夕刊の締切が迫つてゐるのに、A君は夕刻からやりかけてゐる仕事を一向かたづけない。見ると、しかしAはちやんとその仕事には向つてゐるのだ。たゞそれがはかどらないといふだけのこと。それで私が『君、もう時間だよ』と注意すると『あ、さうか！』とA君は初めて氣がついたやうに言つて、その仕事はまあすぐ片づけてしまつた。が――かういふ風に、A君はもう一週間ばかりも前からどうも少しぼんやりしてゐるやうだ。默つて鬱ぎ込んでゐる時が多い。私は、これは何かよほど考へにある事でもあるのだな、と思つた。が、しかし私には用もなささうなことなので、ついその儘まだ訊いてみないでゐた……。

A君は、尾張町へ出るまでは殆んど默り込んで大股に先に歩いた。時々、ステツキをヤケに敷石に突いてみたりした。それで私も默つて從いて行つた。

尾張町からA君は今度は京橋の方へ歩くのだ。さうして、夕方の、交叉點のひどい人混みをやつと拔け、交通が少し薄らいだところで――そこでA君は急にゆつくり歩き出した。それから私の顏を見て、

『君。僕は、女房の不義を――女房の不貞を發見したんだ。』

と、突然――全くだし拔けにそんなことを言つたのだ。それはひどく慍つてゐるやうに見えるのだが、だから自分ではよほど思ひ詰めてゐたことをいま始めて、やつとそれを口に出したものに違ひない。――A君はさうして、また考へ込んで十歩ばかりも歩いた。それから、

『さう。』とA君は今度はなかば自身にも言ひきかすやうに、『それに違ひはない!』

と言つた。私にはA君の言ふことは、無論その文字どほりには聞きとれたのであるが、これだけでは何が何だか一向わからない。そこで私も訊ねてみた。

『どうしてまた君、そんな……?』



『いや、それが――恥を話さねば判らぬが、僕は一週間ほど前に、さう、ちやうど前の土曜日――僕が夜勤だつた次の朝、初めてそれをはつきりと發見したのだ。證據を握つたのだ。』

A君は一語々々力を入れて、ひとりうなづくやうに言つた。まことに悄氣返つた、沈鬱さうなやうすでしかも內にはよほど亢奮したところがあつた。そしてそれから、歩きながらA君は私にその事を詳しく話したのだ、それは次のやうである。

前の夜――と言つても實はもう明る朝なのだが、A君は夜勤を終へて朝の一番の電車で歸つて來た。無論その時細君は寢てゐた。さうしてA君は今度は九時少し前に眼を醒ましたのだ。

――今日は休みだし……と、A君は今朝はいつまで寢てゐてもいいわけだつた。しかし細君は起き上つてもう見えなかつた。――かういふ日には、自分でも寬いでどうかするとA君よりも却つてゆつくりしてゐるくらゐの妻君であつたけれども……。

――今日も天氣はよささうだし、も少しぐらゐ寢てもいいが、しかしそろ〳〵起きるかな、――A君はやつぱり床の中でこんな事を思ひながら、横になり脇の下に枕を支へると煙草を一

本啣へた。――これは朝起き上る時のA君の癖なのだ。A君はさうしてそれから其處に殘されてゐる妻君の枕を弄んでゐた。横に立ててみたりまたくる〳〵と廻して見たり――つまり、意味もなくたゞそんな事をしてゐたのだ。そのうちにふと、A君は妻君の――枕の脇に五厘ぐらゐの長さの眞黒い髪の毛が白い敷布の上に落ちてゐることを發見したのだ。これは？ とA君が不思議に思つて急いで眼を近づけて見ると――博物學者が顯微鏡をのぞくやうにしたのだ。――よく見るとそれは三本あつた。しかも皆大抵同じやうな長さで迚も一分とはない。そしてぢつとそれを見てゐるうちに、さうだ、これは――とA君は思つた――これはよくあるやつで一旦理髪した後でもう一度仕上げをしてさうしてそのまゝ殘つたあの髪毛に相違ない。向うでは一本でも不揃なものを殘すまいと丁寧にやるのだらうが、それがいつ迄も着物の襟に喰付いてゐたり襦袢の裏にジカ〳〵と挾まつてゐたりなどして、こちらでは却つて迷惑をする、あの極く短かい斬り毛だ、さうだあの毛に違ひない。それにしてもそんなものが一たい、またどうしてこんなところに落ちてゐるのか？……。A君の疑念は先づかうして起つたのだ。

――これ見給へ。僕の頭はこのとほりだ。――このあひだから行かう〳〵思つて、ついまだ



斬らないでゐたところなのだ……

なるほど、さう言ふA君の頭は實際もうそろ〳〵耳の上に乘つかかりさうになつてゐる。だからこの斬り毛がA君のでないことは言ふまでもない。さうして又、

――僕の女房も、近年床屋へは行かないのだ。顏や襟足ぐらゐは時々僕が剃つてゐるのだから……

とA君は、これはしかし少うしばかりきまり惡る氣に説明をする。

『かうして、だからそれが内の誰のでもないとすれば、外から入つて來たものだ。つまり、女房が――斬り毛のまだ新らしらしいところを見ると、僕のその夜勤の晩らしいのだが――僕の留守に、他の男のものを……』そこでA君は一瞬眼をつむつて默つた。――『さうだ。さうしてつい附けて來てゐたものに相違ないのだ。全くさうなのだ。』

とA君ははつきりと言つた。その時、しかし私たちはもう目的のカフェーの前まで來てゐた

『僕はどうも、少し敏感過ぎていけない。』

A君はさう呟きながら、ドアを押して先に入つた。

夕飯時なのでカフェーはかなり混み合つてゐた。しかし私たちが入つた時にちやうど壁際の一組が立つたので、幸ひに私たちはすぐその後を占領することが出來た。

『ホットウィスキー二つ。』

A君はそれだけ言ふと、今度は懐から財布を出してさうしてその中から散藥を一包取り出した――と、その時私は實際さう思つたのだ。ところが、それからA君があたりをちよつと憚かるやうに又それを片手で隱すやうにして、恐々と展いて行くのを見てゐると、それはしかし藥包紙ではなくて白い半紙だつたのだ。A君はそれからそれを私の方へ持ち上げて、

『ねえ君、これなのだ。これがその――女房の枕の下に落ちてゐたといふその』

見ると、なるほどA君の言ふとほりこれは散髪の時殘つた毛だ。

『ね。そしてこの斬れ口を見たまへ――このまだ新らしい……』

A君はさう言ひながら、尙もそれを私の眼のそばに持つて來てくれる。私は――しかしさういふ斬れ口の事はよくはわからなかつたけれども、默つてうなづいた。



A君はさうしてそれを、うつかり――一本も失くなさないやうに、又丁寧に紙を細かく折り疊んで財布に納めながら

『ね。さうだらう? 僕はこれだけは違はないと思ふのだ。』

ともう一度念を押すやうに言つた。

そこへ註文のものが來た。私たちはそれを飲みながら、A君はまた續けて言つた。

『僕はしかし、この――相手の男がどんな人間だかといふことは、それは大たい解つてゐるのだ。といふのは、先づ……その男は僕などよりはどうしても若いのだ。二十七八か?せゐ〲いや、ひよつとすると、僕の女房は二十五だがそれよりも一つ二つぐらゐ年下かもわからないんだ。さうしてこれは、この斬り毛がこのとほりまだ艶々と黑いからといふ譯ばかりではないのだよ……そして又、君、それよりももつと確實なことは、僕の女房とその男との關係はきつとまだ日が淺いのだ。さうだ、極く淺いのだよ……』

私は、そこで、どうしてそんな事がわかるかと訊ねた。すると、

『まあ考へても見たまへ。』A君は更に言ふのだ『何故なら君、これが第一吾々のやうに一と

ほり年をとつた者なら、それからまたその關係がもういゝ加減深い馴染の仲だとしたなら、女に遭ひに行くのにわざ〳〵その日に散髪などはして行かないよ。』
『それはさうだ。』と私は答へた。それから――けれども私はまた言つた。
『しかし君、たゞそれだけの事で――つまりその斬り毛が細君の枕のそばに落ちてゐたからと言つて、すぐ君のやうにさうとばかりは……』
『いや、それが――そのとほりこれは唯單に物的の證據に過ぎないけれども、實は君、まだほかにも色んな事があるのだよ……』
とA君はいかにも淋しさうに、さうして獨りうなづきながら、默つてしまつた。
それから又、しばらくして――A君は私をぢつと見てゐたが、
『ねえ君。』と、ふと思ひ出したやうに言つたのだ。『君が若し、そんな頭でなかつたら、この際僕は君をまで疑つたかも知れないよ。』
さうしてA君は氣の毒さうに笑つた。私はつい――横を見ると、ちやうどそこの壁に懸つた鏡に明るい電燈の下に私の頭は滑かに照つてゐるのだつた。禿げた頭も、また、とんだところ



で身を助けるもの哉……私はさう思つたばかりでなく、それを口に出して仕方なく一緒に苦笑したことである。
それにしても、A君はこのとほり――まして妻君はよほどの美人だといふことだし、自分も友達甲斐に、何とかしたいものだとは思つたのであるが、しかし私にはこの――三本の斬り毛といふだけでは、これをこの上どう探偵することも出來さうにはない。』

# 白服の悲しみ

## Ｋよりの手紙

しばらく御無沙汰をしてゐます。いろ〳〵お詫びをしなければならぬこともあり、是非一度伺はなければならないのだけれども、何しろ敷居が高いので、先生だけならば兎も角もまだお馴染の淺い奥さんにはどうもばつが惡るくて行けないのです。

六月に拜借したものも、もう期限が來てゐながら、その方の音沙汰もいたさず重ねてかういふお願をするのだから、いかに厚かましい私でも餘り圖々しくて申上げ兼ねます。どうぞ奥さんには御内密で御覽を願ひます。

度々申上げた通り、氷屋の方は運惡く今年は夏中御承知のやうな涼しさで、それに何しろ素人商賣のものだから元も子も美事にすつてしまつて、その節には九月一バイにはきつと堅くお約束をして置きましたが、右のやうな始末で全く何とも方法がつかないのです。それでもお蔭で氷を商つてゐる間は兎も角も、家賃と米代とは滯らずに濟んだのだからありがたいわけで

すが、その方の店をやめてしまつた今では、家内には内職はなし、私の方の働き一つなのですが、ボスターだの看板だのウインドーの裝飾だのといふものは、性質上前から顧客はきまつてゐるものではあるし、新規な店といふものは此不景氣にさうざらにあるものではなし、始めは幾何かのたしにはなるつもりでゐたのに、無駄骨折のくたびれ儲けでほんとにこれで電車賃でもくれなければ、女房にガミ〳〵いはれながらでも家に寢てゐた方がましなのですが、電車賃だけは持出さなくとも濟むので、私の性分として外へ出て與太を喋つて、それに御承知の通り誰とでもすぐ例のワイダンを話すものだから、お蔭で時折ビールの一本位にはありつくといふ始末です。で自分だけは兎も角もやつてゐたわけなのですが、こゝに一大事といふのはどうも安閑としてはゐられなくなつたのです――といつてまた例のカフエー××事件のやうなことを仕出來したのではないのだから御安心下さい。私の一大事といふのは、私は今でもまだ白服を着てゐることなのですよ！

白服も九月末まではまだ好かつたのです。それに今年は殘暑が酷しかつたので、晝間は白服でも恰度好かつたのです。でも九月の中頃になると、めかしやは暑いのまで我慢してスコッチの單枚の合着を着込んで細いステッキなどをぶらさげて歩いてゐるのを見ると、私も燒きもきして腹が立つのです。その中に日に日に白服が少くなり、それから麥藁帽が全く見られなくなつたのです。私はこのときにも隨分煩悶をしましたよ。私にも古帽子はあるにはありますが、白服の上へ黑のソフトを被るわけにもゆかず、然しこれは八十錢奮發して白いやうな黑いやうなハンテイングを一つ女房に買はせると、兎も角も帽子は解決つきましたが、ところで帽子の解決のついた頃には意地惡くまだ九月の中ばなのに、めつきり寒くなつてしまつて町の中で白いものを着てゐるのは、少くとも表通りで電車の窓から見るところでは巡査と私きりになつてしまつたのです。私は十月一日の來るのが恐しいやうな氣持になりました。でもその豫想はそれが實現されたときに比べて見ると全く力のないものでした。十月一日になつて――忘れませんが此日は實に朗かな秋晴でしたが、さうして私は自分の白服をそれ程辱ぢてもゐなかつたのですが、然し町中の巡査が一勢に黑くなつてゐるのには、全くがつかりせずにはゐなかつたのです。私は思ひ切つて勤の方は、やめてしまふかとさへ思つたものです。結局こんな仕事でもまだしないよりはましだといふ未練があり、それにやめるといひ出すと女房が泣いて怒るので、

その考へだけは思返してそれでも二三日の中に何とか苦面して見ようと、勤先の方は三日程休むといつてやつたのです。何氣なく風邪を引いたからといつて書いてやつて、後で自分ながら可笑しくなつてしまつたのです。今時分白服を着てゐるんぢア風邪位引くだらうよと、その葉書を受取つた奴が嘲笑つてゐる聲が聞えるやうな氣がするんです。

　四日も休んで工夫はしたがたうとうどうにも仕方がなく、女房はメリヤスを一枚行李の底から取出して、私にそれを白服の下へ着込めといふんです。そんな見つともないことは出來ないといふと、これだけ貧乏をしてゐながらそんな贅澤をいへた柄ではあるまい、人は皆セルを着て氣の早い人は袷に羽織まで引かけやうといふ季節に私は黑くこそはあるが洗ひざらしの絣を着てゐるぢアないか、男の僻にそんな贅澤や見榮をいふといふあたりまでは筋道は通つてゐたが、さうなると女房の例の僻でヒステリーを起して、そんなお洒落をいひ出すやうならば勤先に若い女事務員でもゐるんだらうなどといひ出したもんだから、この寒空に白服がいやだといふのは洒落や贅澤のさたではないといふと、ヘン心柄だよといつて嘯くので、その女房を私はいきなり叩きつけて飛出したのです――白服を着てですよ。心柄だよなどと女房がいふのは、



例のカフエー××の件で金をとられた一年半も前の事を、未だ根に持つてゐやがるんです。

　飛出して見ても行くところはなし、また折角白服を着て飛出した以上、馬鹿なところをうろついて恥づかしい思をするより、勤に出た方が好いわけだから出かけて行つて見ると、主任が嫌な顏をしてあんまり度々休んでもらいたくないとか、君はどうも外交的手腕がないとか、もう前貸がいくらになつてゐるとか、この上勝手に休んだりするやうだとやめてもらはねばならぬやうなことになる、などとぬかすものだから、私は丁寧にお辭儀をしてへい〳〵有難うございますといつてやりました。私はいつでも糞を食へといふときに、有難うございますといふことにきめてゐるんです。

　私は一たんは自分でやめやうと思つた位だから、やめさせたつてかまはないと腹を据ゑては見たが、今日出がけに女房とした口爭のことを考へて、これはどうしたつてこゝへでも勤めてゐなければならぬ。でないと電車賃を自辨で毎日外に出なければならぬやうな破目になる。つまり女房と毎日口爭をしても暮せないからなのですが、それにしても私は女房は嫌ひではないのです。あれも他に行くところがあつたのに、私のところへなど來てしまつたばかりに散々苦

勞もするんで、その點を考へると氣の毒だし普段はおとなしく善良な女だのに、何かの都合で吸鳴り出すと、普段とは別人のやうに氣が強くなりそれにあの女がどこで覺えたかと思ふやうな品の惡い言葉を連發するのです。色魔だのごろつきだのといはれるのは、事實君子人でないにしても餘りうれしくないところへ、自分がさう呼ばれるといふそのことよりも、自分の女房の口からそんな品の惡るい言葉が出る度に、私はあの女が嫌になりさうで――根が嫌でないだけにそいつがひどく困るのです。

辱も外聞もなく書立て、しどろもどろで嫌なことばかりお聞かせするやうですが、もう少し聞いて下さい――さういふわけで私は勤をやめることも出來ず、休めば首になるかも知れず、他に着るものはなし今でもやつぱり白い服を着てゐるのです。冬のメリヤスを着てゐるから、寒いことはないのです。それに私の仕事が外交だといふ、人に顔を合せる商賣でなければ、勤の往還りに人が顔を見る位はもう超越してゐます。とは考へるものゝ此頃の天氣はどうでせう。いつもよくあるとはいへ、まるで梅雨のやうに、私は知つてゐます、今日でもう九日間雨ばかりなのです。見〱ともないばかりではない、私は冬のメリヤスに股引をはいて、それでも白服



では震えるのです。それに今まではただそんな氣持がするだけだとばかり思つてゐたのに、今になると私が電車に乘れば、人々は露骨に私の顔を見るんです。それに靴は底が破れて浸水するし、靴下の底は破れてしまつて、そこへ持つてきて水をふくむので、電車の中では私はいつも死んでしまひたいやうな氣持までするんです。それに私はいつのまにか、こんな馬鹿げたことで神經衰弱を起してゐるのですね、きつと。

もう、私のお願ひの筋はほぼお判りだらうと思ひますが、私はあなたにおすがりして此際是非とも二十圓許り拜借したいのです。さうすると私は古ほけたのだけれど、この春といつても六月中頃まで着てゐて、あなた方に笑はれたあのモーニングが質から出せるのです。あれは十二圓でそれに女房にも袷の一枚位も出してやるし、若しそれで多少でも殘つたら靴の底をうたせて、兵隊のはく靴下の一足も買ひませう。

いつまでも泣言をいひつづけても同じだからこれでやめます。この手紙はこんな小さな字で書きましたが、實は三錢で届くやうにと思つてです。

若しいつかお眼にかけたシナリオが役に立つやうならば、あなたのお言葉添でさうしてもら

へると、これが一番好いのですけれども……十月十七日

### Sよりの返事

十月十七日付の手紙は見ました。中々面白い――といつては氣の毒だが、兎も角面白くその序にお氣の毒に拜見した。君のやうな快活な人がしほらしい手紙を書くので、ちよつと動かされたがぼくは君にはいつもその手でやられてゐるものだから、今度も中々油斷がならぬと思つてゐる。君は口說上手だよ。しかし白服の悲しみは思つきでは言へさうにもないから、實感だと思ふ。これがシナリオになるんだと、世話をしても好いがな。いつぞやのシナリオは白服の悲しみほど面白くないから、ぼくが口を聞いてもものにはなるまいよ。それよりも好い話があるんだよ。だがちよつと手紙では書き難い。外聞を憚ることなのだから、一度訪ねて來てくれ給へ。夕方ならいつもゐます。白服で涼しさうなところを、一つ拜見したいものだね。



かういふ手紙の往復があつて、K生とS生とは會つた。

S生はK生が白服をほんとうに今でも着てゐるかどうかを確めたかつたのだ。さうして舊い友達ではあり、何彼につけていつも尻拭ひをさせられてゐる腹癒せには、いつのまにかS生はK生をからかひものにする氣味がある。

K生は全く鼠色をした綿麻の白服を着てゐた。その下には果して冬のメリヤスを着込んでゐた。やつぱり白服の一件は嘘ではなかつたと見える。雨の日であつたからK生は臺所口に廻つて、雜巾で足を拭いて上つて來た。いかにもひどく靴に浸水すると見えて、指が白くふやけてゐた。

K生はしかしニコ〳〵して氣の好ささうな表情をした男だ。S生はいつた。

『君は白服を着てゐるといふが、嘘ではないか。それは灰色の服ではないか。』

『ヒヤア――』相手は小鼻をふくらまして笑つた。『ぼくだつて洗濯代位はあるんだが、まさか洗濯してはなほ着られませんよ。』

『一體君が好くないのさ。ぼくがどこへ世話をして見ても、尻が落着かんのだものね。細君の

いふのは無理はないよ。いつだつて君、女のことよりほかにはしくぢらないんだからね。』

『ありがたいぞ。かういふ意見をしてくれるやうならば、いづれは黑い洋服を着せてくれるつもりらしいから——ときに奥さんは？』

Ｋ生は風向の惡るい話を變えやうと思ふのか、さう尋ねたのである。

『君が奥さんがゐたら氣まりが惡るいなどといふ神妙なことをいふから、外へ出しておいたのだよ。君と媾曳をするために、細君まで遠うのけておくんだから親切なものだらう。それは嘘だがね。ちよつと外聞を憚ることなんだよ。その前にいつておくが、ぼくはさう度々二十圓の三十圓のと君に貸せるのはお斷りだ。それよりも君自分で稼いだら好いと思ふ。』

『だつてぼくにはすることがないんだから。』

『することで而白いことがあるんだ。』

『ぼくにでも出來る？』

『出來るとも出來るとも。君が一番適任なのだ。それに最も簡單に、むづかしくないことで金がもらへるのだからね。』



『どんなことだらう？』

『…………』

『じらさずに教へてくれたまへ。』

『三時間ほどその仕事をすると五十圓ほど金をもらえるんだがね。』

『ぼくでも？』

『あ、君が最も適任なのだよ。』

Ｓ生は笑ひ出したくなるのをぢつと我慢してゐた。それから一段と聲を低くして、

『君は知らないかも知れないが、ぼくの方の撮影を以前やつてゐた男が、この頃、實は、猥褻なフイルムをつくつてゐるんだよ。そのモデルを一人ほしいといふのでね。筋は知らない。きつと、まア餘り大びらにやれないものだから、面白いことをするには違ひないんだね。話が話だから、うかつに人に相談も出來ず內密に心當りを探してゐるらしいのだが、どうだね一つ、君はやつて見る氣はないかね。』

Ｋ生は小鼻をぴくつかせて笑ひさうにしたが、笑はなかつた。Ｓ生は相手が怒つたかと思つ

た。しかしさういふことで怒るやうな男でもないがと思つて、だが、氣まづい思をしてゐると
そのときK生は突然眼を上げて、S生の顔をまともに見つめそれから眼を落して、呻るやうにいつた。

『やらう!』

その答へ方が餘りに眞面目だつたのでS生はすつかり面食つてしまつた。S生はテレかくしに笑ひ出しながら、呶怒つた。

『馬鹿な。嘘だよ。そんなことを眞にうけて返事をする奴があるものかね——今まで時々君に何彼とせびられる仕返しにちよつとからかつて見たんだよ。怒つてはいかんよ。』

『ヒヒヒヒヒ……』

K生は氣味の惡るいやうな聲を出して笑つた。でも大して怒つてゐない證據には、口元にはいつものやうな人の好い微笑を浮べてゐた。

S生はつまらない惡戲のために合着のコートを一着と幾何かの電車賃を呈供しなければならなかつた。



夫婦の冬着を買入れに行つた女房が歸つて來たときに、S生は細君に合圖をしてその買物を出させなかつた。

調子を一本つけてS生とK生とはそこで夕飯を初めたがK生はいつものやうに、陶然とはしなかつた。——S生の氣のせゐでさう思つたのかも知れない。

# 指輪

日曜日の夜であつた。川瀨松吉は女房のしげ子と一緒に銀座を歩いてゐる。
それは實に三四年來の事件である——彼等がかうして二人づれで歩くのは。
そればかりか、今日の散步は松吉の方から言ひ出したのである。
それだのに松吉自身は厭々誘はれでもした者のやうに步いてゐる。しげ子を置き去りにするやうにすた〳〵と步いてゐる。小柄なしげ子が人ごみのなかで夫を見失ひはしないかと思つてきよと〳〵してゐるのを松吉は知らぬげに見える。しげ子にとつては、それでも、この漫步はうれしいのである。
さすがに松吉は立ちどまつた。しげ子を待つてやるつもりなのだ。立ちどまつた松吉はしげ子が五六間も遲れて步いてゐるのを一瞥すると、それを待つ間、彼はシヨオウヰンドウの方へ立ち寄つた。
そこは偶然、寶石商の前であつた。

「まあ、いい指輪があること！」
いつの間にかしげ子が追つついて來てゐて松吉にさう言ひかけたのである。が、松吉の見てゐたのは指輪ではなかつた。ネクタイピンであつた。
「…………」
「ね、あの指輪いいでせう。ああいふのがはやるの？」
しげ子は默つてゐる松吉に話しかけた。しげ子は指輪が欲しいといふのではない。ただ夫との話題がほしいのだ。それは松吉も知つてゐる。そこで松吉が言つた。
「どれだ？」
「そら、」しげ子はガラス越しに世帶染みた手で指ざした「ね、あの上の列にある左から三番目」
「大きなルビイかい？」
「え、え、」
それは平べつたい楕圓形のルビイであつた。なるほどそれが流行と見えて、表はただ平に滑らかに磨いてあるだけである。なか側は切子に磨いてあるので、それが表へ透してうつる。光



る。新らしい形であつたし、石は大きくて立派であつた。が無論人工石の安いものである。y13.50といふ札がぶら下つてゐる。それがしげ子にはよく讀めなかつた。
「高いんでせうね。いいわねえ」
「安いよ、十三圓――十八圓じやないだらうな――十三圓五十錢」
松吉はさう答へながら自分でも安いものだと思つた。すると、松吉の頭のなかへその指輪をはめてゐる一つの手が思ひ浮んだ。松吉はひとり言のやうに言つた――
「安いのだ」
「まあ、安いのね。いいわね」
しげ子の聲は、松吉の聲におびき出されたのであつた。それをねだる樣子は少しもなかつたが、ただそんなものなら自分たちにも買へさうだといふ喜びであつた。
「駄目だよ」松吉は言つた「あれや、お前、十七八の――せいぜい十九ぐらいの娘の指輪ぢやないか。子供を抱いてあんな指輪をしてゐると人が笑ふよ」
松吉はさう言ひながら再び歩き出した。

「さうね。さうだわね」

しげ子もさう言ひながら素なほについて歩いた。

「……でも、」しげ子は十歩ほど歩いてから言ひ出した「でも、私、ルビーの指輪を一つ欲しいわよ。――前にあつたのが無くなつたのですもの。――お母さんと湯ケ原へ行つてゐた時、お母さんが無くなる前の年なのよ。そこの宿屋で指輪が見えなくなつたの。――やつぱりルビーで。十六かそこらの時お父さんが大阪からお土産に下さつたのよ。――自分の不注意から紛失したのだからつて、そのままにしたけれど。――さうだわ。(さう言つてしげ子はちよつとためらひ氣味に)ちやうどあなたから始めてお話があつたころなのね。ルビーの指輪を見ると、だから………」

歩きながらしげ子は話した。それは、囁くやうに息せわしさうに言つたせいか小娘のやうな話ぶりであつた。しげ子はもう少し話したかつた。けれども夫がただいい加減な返事をするだけで滿足に相手になつてくれないのに氣がついた。さうして、見上げると夫は不機嫌さうな顏つきをしてゐる。しげ子は自分があの指輪を買ひたがつてゐるものと夫に思はれたのぢやない



かと考へると、びつくりして口を噤んだ。

松吉は、しかし、さうではなかつたのだ。松吉はしげ子の話を聞き入つてゐた。聞き入りながら、さうして時々さつきの指輪の嵌まつてゐる或る手をちらちらと目の前に見た。――それは白い手である。柔な手である。長い指である。ペンを輕く持つてゐる。

……しげ子の手が、五年むかしだつて、これほど美しかつたらうか?……

目の前に甘美を浮べて、心の底で苦澁を味つてゐる。そこで松吉は沈んだ顏をしてものを言はない。

一週間ほど後であつた。

會計で月給を受取つた松吉は胸算用をしながら、階段をゆつくり下りた。松吉は、今度の土曜へかけて會社の仲間が皆して利根川べりへ遊びに行くのを、自分だけやめるつもりでゐる。自分が當番幹事で發議したのも自分だが、その當日前になつて急に用事が出來たことにするつもりでゐる。

階段を下りると屋外はまぶしい入日の初夏であつた。

あれも今日からもうセルの着物を着てゐたつけ。そこで松吉はニッコリした。

松吉は急ぎ足で銀座の街を歩くといつかの日の寶石店へ這入つた。ちよつと氣怯れがしたやうではあつたが。

二日ほど後であつた。

三つになる子供の服を買ひに行つたしげ子は一時間ばかり經つて歸つて來た。それを子供に一度着せて見て安心すると丁寧にたたみ直しながら、しげ子は夫に言つた。

「あの指輪ね。この間のルビイの、誰か買つたと見えてもう無くなつてゐてよ」

「指輪?」松吉はさう言つたが驚いたやうでもありとぼけたやうでもあつた。それから言ひ直した「ああ、あの指輪か……。ウヰンドウに無いからと言つて賣れたとは限るものか。もう十日も經つてゐる。飾り直すかも知れないじやないか」松吉の聲は慍つてゐるやうであつた。それを松吉も氣がついたので默つてしまつた。その時、電氣が來たものだから部屋のなかが急に



明るくなつた。すると松吉は急に立上つて、とんとん二階へ上つてしまつた。

しげ子は自分が何氣なく言ひ出したことで夫があんなに機嫌を惡くしたのを不思議に思ひながらしばらくぼんやりとそこに座つてゐたが立ち上つて、子供を子守に背負はせると、自分はおそくなつた夕飯の用意を急ぎ出した。

郊外の貸家の安普請は電車が通りすぎてもちよつとした地震ぐらゐ搖れる。その不安な二階の欄に松吉は凭りかかつてゐる。その欄の下を泣く子をあやしながら子守が往つたり來たりする。重く曇つた夕空を見ながら不機嫌に喚き立ててゐるのは松吉の子である。

――それにしても、あの指輪がそんなにしげ子の氣に入つてゐたのかなあ。

今、松吉の目には二つの笑ひ顏が交々見えて來る。それは指輪の話を自分にしかけて自分がきげんを惡くした時に、自分の顏色を覗ひながらしげ子がいつもそんな時にはきまつてするあの意味のない笑ひ顏である。今日は夕闇のなかであつたから見えもしなかつたが、唇の片方だけがぎゆつとくぼむ無理につとめるやうな笑顏である。そのさびしい笑が四五年前に松吉の心をどんなにひきつけたことか! もう一つの笑ひ顏は大きな桃色の花のやうに明るい。若々し

い肩をセルの着物につつまれて、事務机の向ふから時々そつと松吉を見上げてはうつ向いたままで笑ふ……。そのあの女の輕くまるで弄ぶやうにペンを持つた手のやはらかい指には昨日から大きなルビーの指輪がはまつてゐる。

そつと松吉に倚り添うて、たつた今新らしく嵌めた指輪のある手を松吉に見せながら、かの女は公園のアアク燈の下でどんなに無邪氣に笑つたか！　それが松吉にはどんなに美しかつたか！………

松吉は思はずほつと溜息をした。二つの笑ひ顏——松吉の目に浮ぶ二つの笑ひ顏のそのどちらかが、せめてあんなに笑ひさへしなければまだいいのだ。いやいや、あの指輪をしげ子が見つけたのでなかつたらまだいくらかよかつたのだ！　——自分はどうしてもつと外の指輪にしなかつたらう………。　松吉はひとり呟いた——

「それにしても、あの指輪がそんなにしげ子の氣に入つてゐたのかなあ」

川瀬松吉君。



君はまともな人だから、私が君を揶揄してゐると思ひはしないだらうが、ほんとうに私は君にも同情したい——臺所で味氣なく火の番をしてゐる君の細君にはもとよりだが。

一たい神さまはどうして人間にかうも一途でない心をくれたものか。川瀬松吉君、若しわれわれが神樣に逢ふやうなことでもあつたら、一つ、そのことを尋ねて見ようではないか。

それに、一たい、嘘といふものは生育するものだ。一つの嘘を遂げる爲めには千の嘘を言はなければなるまい、これは全く手にをへない建物だ。まあ考へても見たまへ。もう五六日もすれば君は仲間に向つて、急に持ち上つたさうしてのつぴきのならない一つの用件を案出しなければなるまい。それからまたそれの次には君は君の細君に利根川べりの宿屋の名や、さうしてもし細君がそれ以上に求めるなら、君は見たこともない水邊の初夏の景色を細描してみせることもしなければなるまい……。

# 家常茶飯

朝田が或日訪ねて來た。

書齋へ通すとイキナリ「(理想的マッチ)を君は持つてゐないか」と言ふ。

「何、(理想的マッチ)て何だい」と、僕は聞いた。

「お伽話なんだが、僕は其のテキストを無くして弱つてゐるんだ。年越しの金を工面する爲に受け合つた例の拙速な飜譯仕事の一つなんだが、本屋が出版を馬鹿に急いでゐるのでね。外國に註文して取り寄せるにしても、時日がもう間に合はないのだ。クリスマスの贈答用をアテコミなんだからね。

君のところには色んな本が澤山あるから、ヒヨツトしたら持つてゐないかと思つて來たんだが、珍らしい本でもないのにあまり見かけない——アツサージの初期の作なんだ」

「うん、聞いた事は有る様にもあるが、あひにくと僕は持つてゐないよ。何うして又無くしたんだい」

「それがね、飜譯はもう出來上つてゐるんだ。原稿は印刷所に廻してあるんだがね。只大人に讀ませるんならあのままで好いが、子供の爲には、挿繪を入れないと解りが悪るいだらうと本屋が言ふのだ。全く、そのテキストには古拙な初版の木版をうつした挿繪があつて、文字に書けないやうな點までちやんと説明してゐる。一度それを見たものにとつては、この挿繪なしには、この話は成り立たないと思へる程なのだ。だから、そいつをそつくり挿入する考へで、本屋が僕の家へ原本を取りに來たんだ。その日、本屋は店員と二人連れでやつて來たんだが、僕はたしかに本屋に渡した積りなんだよ。

「所が翌日使ひをよこして、その渡した筈の本をとりに來たのだ。そんな筈はない。たしかに君のうちの主人が持つて歸つたよと僕が言ふとね。使は歸つて行つたが、二三日して今度は主人自身がやつて來て、

「イエ、お宅を出てから、あなたが出して下さつた本を、編み上げの紐を結んでゐる間、上りかまちへ置いたきり、つひ、オーバのポケットに入れる事を忘れて來た事に氣が付いて、引き返して取りに來ようと思つたんですけれど、餘程歩るいて來てゐたものですから面倒臭くなつ



ちまつて」

と言ふんだ。

本屋の主人は酒を飲むのでね。其の日も僕は晩めしでも食つて歸るやうにすすめた時刻だつた。だから、歸り途に一杯やつてゐる間に、醉拂つて原本を遺失したんぢやないかと思ふんだ。それでさう言ふと、決して其んな事はありませんと本屋は言ひ張るのだ。

實はカフェーに寄つて、一杯飲んだには飲んだんですが、そこであの連れて來てゐた店員が私に、「本を上りかまちへ忘れて來ましたね」と言つたので思ひ出したやうな譯なんでして、きつとあなたの家にありますから、探して下さいと言ふのでね。

僕も本屋の主人一人がさう言ふのでなく、連れの男もさう言つたと言ふなら、二人を否認する事は出來ないと思つたので家の者を督勵して、家中探してみたんだ。

所が無い。どうしても見付からないんだ。

癪に觸つてね、畫家に頼んで別に挿繪を描かせても好いんだけれど、それも氣が利かない事だし。困つたよ」と朝田が言つた。

僕は朝田に少しばかり同情したけれど、どうしようもなかつた。それで次のやうな話を僕は朝田にしたのだ。

僕は或一人の男を知つてゐる。それは僕の友人なんだが君は知るまい。——少し變人で世間の狭い男だから。書生を一人置いて、今でも獨身で暮らしてゐるんだが、妙な奴だ。

あの男に探偵をさせて見たいと僕は時々思ふのだ。探しものなどもきつとうまいよ。

それでね。書生を置き初めて、間もない頃の話なんだが、偶然彼のところへ遊びに行くと、彼は、

「うちの書生はどうも男色漢のやうだ」

と言ふのでね。「どうしてそんな事が君にわかるのだ」と尋ねると、

「此の間、夕方、書生と一緒に省線の目黒驛から電車に乘つた。切符を二枚買つて書生に渡して、恰度込む時刻だつたので一列にならんで立つてゐるんだ。僕は浴衣一枚で羽織を着てゐな



かつた、僕の肩にそをつと觸るものがあるのでね。ふり返つて見るとそれがうちの書生なんだ。開札口の前で押し合つてる折だし、僕の背後にゐた書生が、僕の肩に手をのせたところで、それは何かの拍子に好くある事で、不思議でも何でもないが、其の觸感がだ。我々ならば若い女にでもさはるときのやうな仕方なんだ。決して同性同士にはああは觸れない。前にのめりさうになつたとしても、それなら尙の事、どんともすこし元氣好く突き當りさうなものなんだ。蓋し異様な、正しく性慾的なものだつたので、僕も少々薄氣味惡るくなつて、擽つたく思つて辟易したんだよ。

それから家に歸つてから、二三日注意して好く觀察すると、怪しい點がどうもあるんだ。だからね、僕は一見して男色家だとは見拔いたものの、一度直接書生の口から白狀させて見ようと思ふんだ」

斯う言つて彼は書生を呼びつけたものなのだ。書生を僕の前に坐らせて、僕を指しながら彼は言ふのだ。

「此の先生は名高い人相見で、その方の隱れた學者なんだ。君の人相骨格を一見して、君は衆

道を嗜んでゐると言はれるんだが、どうだい――」
すると書生が直赤な顏をして、うつむいて了つたんだよ。
如何にもそれまでは、豪快なタイプの青年だつたんだが、流石に耻しくなつたんだらう。氣の毒だつたよ。
それからずつと此の書生が、僕に親しみを持つやうになつてね。段々近しくなり、ちよいちよい僕の家へも遊びに來るやうになつたんだ。來ては主人の噂をコボシて行くんだよ。
それで僕も、あとになつて書生に打ち開けてやつた。
「實は君の衆道一件を見破つたのも、僕ではない。茶本だよ、君のうちの主人なんだよ。」
さう言ふと、「道理で。全くうちの先生にはかなはない。恐ろしく直感的で、緻密で、推論力か強いんですからね」と書生が崇拜するやうな口調で言ふのだ。

これも書生の話なのだが、茶本は、百五十位に小さく裂いた葉書でも讀む。そんな手つだひまでさされるのぢや書生が困るとコボスのも無理はない――



何でも近所に親切なおかみさんがゐて、洗濯物や炊事の手傳ひなども時々してくれる。そのおかみさんが來て、或時茶本に賴んだのだ。
「やどは此の頃變なんですよ。夜遲く出歩いてばかりゐて、其の癖朝など郵便屋が來ると、あわてて二階から降りて來て、郵便物をヒツタくるやうにして、又二階へ上つて了ふんです。をととひの晩も此んな事があつたんですよ。それは葉書だつたんですが。葉書なものですから妾もそんなに氣を付けて讀まないで、只郵便屋が渡してくれたのを手に持つてゐたんです。差出人はたしかに同じ社の人なのです。近頃の遊び仲間なのですよ。所が主人が二階から降りて來て、葉書を私の手から奪ひとるやうにして二階へ駈け上つたかと思ふと、ぢきに主人は外出しました。あとでわたしが二階へ行つて見ると、其の葉書を粉々に引き裂いて、反古籠に放つたらしいんです。私も口惜しくてたまらないものですから、主人が居ない留守にと思つて、其の裂かれたはがきを拾ひ集めて見たんですよ。でも百にも二百にも小さく千斷られてあるので、どうしてもよめないんです。どうかして讀みたいんですが。」
それで茶本が答へた。

「奥さん。そんな事位、わけはありませんよ。工夫も何にも要らない。特つて來て御覧なさい。」

するとおかみさんが、其の千斷られたはがきを持つて來た。書生こそ好い災難さ。半日それに掛かつてしまつたといふのだ。

茶本が何うしたかと言ふと、先づ本の包裝に使つゐたの薄い蠟紙を一枚書生に擴げて敷かせたんだ。そこで別にはがきを一枚持つてこさせて、蠟紙の上へ、はがき大の輪廓を描かせたのだ。而してその蠟紙の上へ、百片にも二百片にも細く千斷られたはがきを、一個々々並べろと言ふんだ。

それには順序があるんだ。

その順序が茶本の即案の工夫なのだが。まづ原則として、はがきの表ばかりを見るんだ。うらは決して見ない。さうして第一に、一錢五厘の切手の青いところを拾ふ。それから、郵——便——は——が——き、の印刷文字の付いてゐるのを探す、それから消印のスタンプのついてゐる破片をさがす。

それらの破片を蠟紙の上の輪廓線に沿うて、新らしいはがきを參考しながら、一つゞゝの順



順にならべて貼りつけるんだ。

それから所書の部分を、次には宛名の部分を、次には日づけの部分を、探し出しては貼る。あとに殘つたのは白い部分ばかりになる。そのなかから又、はがきの四邊をなす直線をふくんでゐる部分を探つてはつなぐ。もつとも、この部分はさう大切な事ではなかつた。何故かといふのに端に近いぐるりにはあまり文字は書いてないらしい。そこで始めて、蠟紙を一々裏返しにして見ては、殘つた紙片を字のつながりやら、破片の形やらに從つて貼つてゆく。蠟紙の面の輪廓線はいつの間にか次第にはがきの破片で埋つてゐた。決してむつかしい事ではなかつたが、中々手間がかかるのには書生も參つたさうだ。それはさうだらう。

そこで、茶本がおかみさんを呼んで言つた。

「奥さん讀んで御覧なさい。何でもありませんよ」

はがきの文面が蠟紙をとほしてホヾ完全に讀めたのだ。

茶本はおかみさんの亭主とも知り合ひなのだ。はがきには別に異な文句も書いてはなかつたさうだが、どうも女がよこしたのらしい。暗合めいた文面だと、茶本は、あとでこつそり書生

に言つたさうだ。

でもおかみさんのヒステリーを嵩じさせては不可ないと思つたので、安心させる樣に、そこまでは茶本も敎へてはやらなかつたのだらう。――かういふ點にかけちや、君、やはり男は男同士のなさけがあるからね。ハ、ハ、ハ。

これもやつぱり書生の話なのだが、つひこの間の或る朝のこと、井戸傍で顏を洗つてゐると、いきなり彼は寢室にゐる茶本に呶鳴りつけられたのだ。

「なぜ玄關を開けつ放して置くんだ！」

「いゝえ、閉めてあります」

「閉つてない。ドンが這入つてゐるよ」

――ドンといふのは西班牙種の小犬なのだ。

「そんなことはありませんよ。先生！」

「何でもいい。早くドンを追ひ出したまへ。僕の靴がめちやめちやになるぢやないか！」



問答してゐるよりも、行つてみた方が早いと思つたので書生は玄關にまはつてみると、果して玄關の格子戸は五寸ほど開いてゐて、その間からドンがくぐり込み、茶本が前夜穿いて出た新調の靴にぢやれてゐた。啣へて持出さうと企てながらそれが出來ないので、土間の三和土の上へ啣へては落し、啣へては落ししてゐた。

「シイ、シイ」

彼がドンを追つてゐると、

「それ見ろ！」と茶本がもう一ぺん寢室から呶鳴つた。何もかも、まるで見てゐるやうなのだ。

書生は全く「いやになつてしまひましたよ」といふのだ。

茶本が夢でも見たのだらうぐらゐに思つてゐた書生は、實際びつくりしたさうだ。しかし書生はいつもやかましく言はれる事ではあり、自分で玄關をあけて置いた覺えはないのだから、朝めしの時になつて茶本に言つた。

「先生、私は玄關を開けて置いた覺えはないのです。ドンは自分で這入り込んだらしいのです。五寸ほど戸が開いてゐました」

茶本はその朝はひどく不機嫌だつた。朝早く起きると彼はいつもさうなのだが。それで書生の言葉に對して茶本は言つた。
「ドンが自分で開けた！　馬鹿を言ひたまへ、靴を啣へ上げることも出來ないほどの小犬に、自分で格子戸を開けるほどの智慧も力もあるものか。いいかげんな事を言つてはいけないよ」
「でも私はいつも先生がさう仰言るから、ぴしやつと閉めて置いたのです」
「君はあそこから井戸端へ出たのか」
「へ？　さうです」
「それなら君は、なるほどピシヤリと閉めたらしい。あまりピシヤリとやり過ぎたのだ。ゆるい格子戸はその拍子にはね返つて四五寸も開くし、俺はまた、その物音で目が覺めたのだ」
――書生は私に白狀して「さう言はれて見ると、全くさうらしいのだ」と言つた。そこで書生は、茶本に、
「先生は、寢呆けてゐながら、よくもそんな音まで聞えますね。驚いた耳ですねえ」
「何をいふのだ。驚くことはない。耳を疊へつけてゐるのだ。起きてゐて聞くよりはつきりわ



かるさ。寢呆けてなんて、誰だつて眼が覺めた時ほど頭のはつきりしてゐる時はない。俺は昔から寢呆けたなんて事はないよ」
書生は私に向つていふのだ「全く、あの日にはさんざんやられましたよ。――先生に女房の居つかないのは無理がないや」
「全く、人間はもつと間が拔けた方がいいね」私はさう答へた。
「朝田君。私が君に行つて相談してみたまへといふのは、かういふ男なのだが、茶本は多分、（理想マッチ）を探し出してくれるだらう――君の家にありさへするならね」
私は紹介に茶本の所番地を書いて、簡單な地圖もつけて朝田にやつた。
それから四五日經つた。茶本がヒョツコリ僕を訪ねて來たのだ。
「やあ珍らしい。この間、朝田といふ男は行かない」
「あ、實は今朝田氏からのかへり路だ。久しぶりだからちよつと寄つてみたよ」

「で（理想的マッチ）は見付かつたのかね」

「有つたよ」

「どうして發見されたんだ」

「わけもなかつた。家中隅なく探したと言ふ。あとは探さないところだけ探せばいい。だからまだ探してないところを探したんだよ。だから譯は無いんだ」

「やつぱり家の中にあつたんだね」

「どんな本だときくと、青白いやうなクロスの薄い大型の本だと言ふんだらう。大型の薄いものなら平面的に置かれてゐれば直ぐ目につく。立體的に置かれると場所を取らないで目につきにくい。——さう思ひながら朝田氏の家へ行つて見ると、壁がみんな青白いんだよ。

　この壁と何か關係があるな、と僕は思つたんだ。

だからね、壁に沿うた光線の當らないやうな薄暗いところを、二三ケ所探したんだ。」

「で、どんなところを」

「先づ便所だね。ところが其處にはないんだ。



　それから二階があつて、段梯子があるね。君、朝田氏の家を知つてるだらう。あの段梯子を三段ばかり上つてから、ふりかへると手のとゞくところに鴨居があるね。段梯子の上り口の眞上さ。あそこの梯子はまあ、何とうす暗い事だ。本は壁にぴたりとくつついて鴨居の上に乘つてゐたよ。うす暗いところへ持つて來て、壁の色と本の色とが殆んど同じなのだ。ちよつと目にはつかない。でも手をのばしてさぐるとすぐ落ちて來た。——バサッと音を立ててね。——地震でも一度あつてくれたらわざ〳〵僕などが出張する必要はなかつたのだ」

「（理想的マッチ）がそこから落つこちたのかね。どうして又そんなところから落つこちたんだ」

「其處は薄暗いんだよ。今もいふとほり。だから何がのつかつてゐてもわからないんだよ」

「だつて、何故、本がそんなところに在つたのだ」

「本がひとりで二階へ上つたのならロマンテックなのだが。僕の解釋によるとだね。言ふまでもなくやつぱし朝田氏自身がやつた事なんだよ。

　朝田氏が最初僕を訪ねて來た時に一時間ばかりの對談中、二三回も便所に立つたので、僕は彼が何かその方の病氣ではないかと思つた程だよ。少くとも小便の近い人だと言ふ事だけはわ

かつたんだ。」

「初對面で君が、其の頻繁なのに氣付いたのは感服の外ない。實は先生以前から糖尿病だよ。」

「そこで肝腎な事は、僕が思ふのにね。朝田氏が本屋を送り出す時に、小便がつまつてゐたんだらうと言ふ事なんだ。

本屋は二人連れで歸つて行つたんだ。

玄關口を見るとね。（理想的マッチ）の原本が置き忘れてあるんだよ。

それで朝田氏は、忘れて行つたな、仕方がない、二階の書齋へ持つて行つて置かうと思つてね。階段を三四段上りかけたんだ。

ところが、今まで我慢してゐた小便なのだ。性急に放尿を要求して來るので、階段の中途で我慢しきれなくなつて、其の（理想的マッチ）を、何げなく手のとゞくところの先刻言つた鴨居の空間へのつけたんだね。

そして便所へ駈け込んだんだ。

よくある事だよ。とにかく小便のつまつた時は物事を胴忘れするものさ。



それで朝田氏は、（理想的マッチ）をそんなところへのつけた事も、本屋が置き忘れて行つた事すらも思ひ出せない程、一切を放尿と共に忘却の壺のなかへ流し込んでしまつたんだよ。いやく、便所の扉から出た時には或は、まだ念頭にその影ぐらゐはとゞめてゐたかも知れない。しかし夕餉の時間だつといふから、きつと二階へ上る前に細君に呼ばれて茶の間で食事をしたね。乃ち鴨居の大切な（理想的マッチ）はここに到つて完全に、朝田式の頭からは消失したのだ。――さうだと思ふ。一たん忘却したとなると、置いた場所が場所なところへ、本も壁も同じやうな色だし、わけても、あそこは晝間でも電燈か瓦斬か、それこそ（理想的マッチ）でも灯さなきや目がとゞかないと來てるんだ。階段の上り降りにも決して氣が付かない。梯子を下りる時には、いつも目の前に現はれる場所なのだから、つひ却つて誰も特別の注意をおこたる。そこがうす暗い事さへ家人は忘れてしまつてゐて、氣が付くのも來客だけぐらゐなものだらう………

――ちつとも見てもゐないくせに、いつも見てゐるやうな氣持がする場所なのだ。」

「ふむ。君の想像通りかも知れないね。恐らくさうだらう。なる程。

ところでだ。それはまあそれでよかつたが。僕も一つ序に君にお願ひしたい事があるんだ。

僕も困つてゐるんだ。外ではないが、どうも訪問客が多いんだ。面會日を火曜に決めてゐても、面會日はまあ二十人位が平均なんだがね。平日でも今日など、君で三人目だが、この分では夕刻までに六人は確かだ。かう毎日澤山では全くやりきれないんだよ。頭も體も疲れて了ふ。自分の仕事が何にも手に付かないんだ。

何か好い策は無いものだらうか。

君の智慧が借りたいんだがね」

「そんな工夫なら造作もないよ。先づ御本人の口をミシンか何かで縫ふんだ。すべて君の饒舌が然らしむるところなんだからね。何事も根本を極めなけや。ハ、ハ、ハ、ハ」

「ハ、ハ」

茶本の名案には、僕も苦笑せざるを得なかつたのである。



# 柱時計に噛まれた話

I II III IIII V VI VII VIII IX X XI XII

文字は星のやうにあざやかな金
その文字板は死のやうにまつ黒
ぐるりは花と葉との浮彫
さてその樣子はと言へばそれは
風にゆれるたつた一房の葡萄の實
熟れて命のやうに甘いたつた一房
このよき細工人は無名でこそあつたが
エピキュラスほどの賢者だつた
美しい教はつつましいから
人には知られずに三十年の間

## 場末の時計屋で塵まみれだつた

これは私がその時計を買つた時に、うれしさのあまりにつくつた詩であります。地震の年のしかもあの怖ろしい事の五六日前に、わたしは、その頃ゐた大森の町のガアドのわきの古い時計店でそれを手に入れたのです。その時それは本當に塵まみれでした。店の主の話では二十五年も三十年近くもう賣れ殘つてゐるのだといふ事でした。多分さうではありますまい。その時計店といふのがかなり古い店らしく、主人の話では彼の父が横濱で店を開いたのださうです。時計屋などといふ新奇な――當時としてはさぞハイカラな店をやつただけに、その人といふのがやはり好事家だつたさうです。そんなことを話しながら四十位のそこの主人は、ふみ臺などを持ち出して壁の上の高いところにあるその時計を、

「これもおやぢの物好きの形身でさ、いつ買ひ入れたものだか、あたしが覺えてからでも二十五年や三十年にはなりますよ。……え、いくらででも買つてやつて下さい。……さようですな



八圓ぐらゐではいかがでせう。」

わたしは時計が氣に入つてゐるところへ、時計屋の言葉も氣に入つたし、値段も氣に入つた。喜んで買ふ約束をして、しかしそれにしたつて機械は大丈夫だらうなと念を押すと、賣手は確實にうなづいて、

「大丈夫ですとも。何しろ、しかも、あまり長い事ほつ放してありますから、一度掃除をして油をさしてから――さよう、明後日御とどけ致しませう。ただね、豫め御斷りして置きますが、こいつは風の當るやうな場所へかけると駄目ですよ。振子がこのとほり外へぶらさがつて出て居るのですからね。何しろ洒麗た細工だなあ。」

さう自分の賣物をほめたのも買ふときまつたわたしには、愉快でした。それでわたしも店さきを見まはしたりして、そこに掛つてゐた古びた銅版畫の額などをほめたものです。全くちよつと見あたらないしにせらしい、それも落ちぶれたしにせらしい床しさのある店でした。

そこで肝腎の時計だが、それは約束どほり三日目のひるすぎに、暑いさかりを店の主人が自分で運んできて、それを掛ける釘までうつてちやんと壁の眞中へかけて行つてくれたのでした。

時計は樂しさうに振子を動かしてゐます――これは風にゆれる一房の葡萄の實。熟れて命のやうに甘いたつた一房の葡萄の實――わたしは、その時計を半日見とれてゐて夜になると、前に言つたやうな詩みたやうなものを書いたのです。ともかくもうれしかつたのです。

そこへ持つて來てあの地震！

あとでしらべてみると、私の時計は壁から落つこちてはゐなかつたけれど、彼は落つこちまいと精一杯努力して居るうちにたうとう發狂してしまつてゐた。わたしはそれを手をつくして直させたが、彼の狂ひはどうしても本當には全快しなかつた。彼は結局半氣違ひだつた――出鱈目の時を打ち響かす。わたしはあきらめてしまつて、彼の打つにまかせてゐるが、それでも夜半に二十四もたてつづけに打つ時には、近所の手前も惡いし、それに第一少しばかり氣味惡くもあります。

或る日、客が來てゐる時にあいつは十三時を打ちました。わたしは困つてしまつて說明をしたのです。



客よ、おどろくな
十三時だ！　時には
二十三時も打つ

だが針を見ろ十一時だ
このキテレツな時計こそ
部屋の主とおんなじだ

かんじやうは出鱈目の
メチヤクチヤだが
理性の針は正しいよ

別の或る日の事でした。やつぱり客が來てゐました。あいつはこの日いつの間にかサボつて

止つてゐたのです。そこでわたしは客との話がとぎれた時、客に時間を聞いて、いきなり椅子の上に立ちあがりあいつにぜんまいを巻き始めました。それから客に對して、それが半氣違ひのダダイストだといふことを手短かに說明しました。といふのはあいつはぜんまいの强い時にはきつと二十四を二度もつづけて打つ癖があるからです。彼のさういふ無作法を――全く世に有るべからざる無作法を、前以て客に謝して置くが主人たるものの義務だとわたしは考へたからです。わたしは話つつねぢをかけました。調子に合せて歌ひ出したのです――

客よ　おどろくな
十三時だ。時には
二十三時も打つ

だが針を見ろ十一時だ
このキテレツな



と！　言ひかけたその瞬間です。

時計は一大叫喚を上げたかと思ふと、私の指にいやといふほど嚙みついたのです。

ぜんまいの鍵を投げすてると、わたしは自分の親指に垂れてゐる血を見ました。

約一分の後、靜にわたしは回想し得たのですが、調子にのつてわたしはぜんまいを捩ぢ過ぎたらしい。バササン、ザン、ボロン！　眞似がたいあの音は時計の心臟の裂けた音響だつた。時計は心臟の裂けた瞬間に、ぜんまひの鍵をわたしの意志とは反對にこぜ返した。鍵はわたしの指に喰ひ込んだのです。

怖わたしの様子に愕いて椅子から飛び上つた客に、わたしは冷靜に言つた――

「キテレツと言はれたのが氣に入らなかつたらしい。この時計は細君のヒステリイのやうにい。ねえ、君！」

客なる獨身の友は笑つてゐます。わたしの言葉の眞意を知らぬのです。尤も、諸君よ、わたしの善良なる細君はヒステリイでは無いのです。萬歲！

# マアクスはどれたけヘルモンを理解したか

怠惰者マアクス、この間、走つた夢を見た、
それ以來、彼はもう眠らうとはしない、走しるのが心配で。（ルシリユウス）

吝嗇家ヘルモン、盛大な饗宴を催すと夢みた、
それの心配から――翌朝彼は縊つて死んだ。（おなじく）

噂する人――市民數人。噂される人――ヘルモン、數日前自殺した獨身者の高利貸。

A。「馬鹿馬鹿しい。たかが一夕の饗宴ではありませんか、それもただそれの夢にですよ――生きて居るこの有難い甘い命を、自分自身の手で殺すといふやうな話は、未だ神話にも聞きませんね。」

B。「當り前ですよ、我々の神々で自分自身を殺したりなどする奴が一人だつてあつてたまるものですか。それじやまるでヘブライの神と同じやうなものになる。一たい我々の國で自殺などするものは克己派の變人だけですからな。」

C。「成程、併しさう言へば、そのヘルモンとかいふ男も日常生活の禁欲的なところは克己派そつくりだつたと言ひますよ――但、金を儲けてそれを貯蓄するのを樂しむだけが少々違つてゐる位で……。」

D。「それだけ違へば澤山だ。」（一座哄笑）

E。「それほど變つてくると——正反對になると結局一致するものですよ、何事に依らず。」
A。「それは然うと、そのヘルモンの遺產といふのはどれ位ありませうかな。それを誰が受けるんでせうな?」

噂する人——さる貴人の「食客（クリエント）」十數人。噂される人——ヘルモン。
（作者註。「食客（クリエント）」とは何等の職業、地位、收入などを持たず——要するに、地位のない貴族、金のない富豪、書けない詩人などで、當時の所謂高等遊民の一種である。ただ勝手な事を喋つて笑ふことを以て日常の高尚な仕事として居た。）
F。「一生、饗宴の一つも開けさうもない我々は、せめてヘルモンのやうな夢でも見たいものだね。」
G。「全くだ。ヘルモンのやうな夢ばかり見て居れば、人生はどんなに幸福だらうなあ。毎晩そんな夢を見る約束なら、俺は起きて居る間は乞食でもいい。」



H。「淺ましいことを言ふな。」
G。「聞き給へ、先づかうだ——賓客は皆、輕いさんだるを履き、綠色やリラ色の絹の宴會服を着て、薔薇色大理石で敷つめた滑かな床石の上に、それらの着物の柔かな美しい色の影を映して、愉快げな顏をもの靜かに客間へ持つて來る。さて北から來た鷲毛をふつくり塡めた深紅の羽蒲團の上へゆつたりと身を横へるのだ。その華やかな饗宴の主人公がこの私なのだぜ。」
I。「滅多に開かない饗宴だ、一度に三十人や五十人位は招待するんだね。」
K。「いやいや、僕は矢張美神の數通り九人づつがいいと思ふ。一體習慣には從ふべきものだそれに毎日開く筈なんだから——『酒は不足するとも、席は常に充分であれ』といふのがブルタアクの說なのだ………。」
G。「……それから料理には、勿論、鯖の肝藏と孔雀の腦漿と紅鶴の舌との皿も出す。酒は言ふまでもなく希臘產の六歲酒とカンパニヤ產の十五歲酒とをなみなみと汲ませるて。」
L。「給仕には、アレキサンドリア生れの美少年を出してくれ——單なる好奇心から黑人や黄色い人間を使ふのは趣味の墮落だからな。」

M。「然うだ。そこで賓客の一人であるリラ色の着物を纒うた俺は、美少年の細い白い手がつぐ葡萄酒に眞珠を溶かして飲むね。大悲劇作者エソップに倣うて。」

N。「は、は、は。それでまた文法の話でもしようといふのか。序に君自身がエソップその人になつて仕舞へばいいに。遠慮をすることはないさ要するにすべてが夢なんだ。」

X。「いけない！　いけない！　君達はヘルモンを理解しようと努めて居ないのだ。」

突然、こんな事を横あひから言ひ出したものがある。その聲は今までのそれに比べると眞面目で沈鬱であつた。この一語は饗宴の最中へ髑髏でも忍び込んだやうに、一座の調子をがらりと覆した。見ると、言葉の主は、今まで默り込んで聞いて居た蒼い顔のマアクスであつた。この男は有名な怠惰者で滅多に口を利くことさへない——口を開けるのも彼には大儀であるらしいのだ。或者は彼の怠惰を單に胃病の結果だと言つた。或者はそれは彼の犬儒派的な叉詭辯派的な哲理から來たものと考へた。或者はイスラエルの王ソロモンの言葉だといふのを或る書物から拾ひ出て『惰者(おこたるもの)はその手を盤(さら)につくるも之をその口に擧ることを厭ふ』といふ句でマアクスを惡罵するといふよりも、自分の衒學を滿足させた。兎に角、そのマアクスが何時にな



く自分から口を切つたのが皆の好奇心をひいた。

マアクス。「一たいヘルモンといふ男は、俺の考へでは、我々と違つた神に仕へて居るのだね。

否、すべてこの人間、皆、その神に仕へて居るのだが、但、誰もヘルモン程忠實に仕へなかつた丈けだ。その神か？　それは「金錢」といふ名さ。生きて居る人間でこの神に歸依しない者は先づ無いね——ところが、大ていの奴はその神ばかりでなく、それとは全然兩立しさうもない反對の神にも仕へて居るんだ。然かも常に自分が神の氏子であることを秘密にしたり、時時便利に裏切つたりする。ところで我がヘルモンはさうではない。信實に徹底的に彼自身の神に奉仕したのだ。それが何故惡い？　彼は自分の神のためには克己派の哲人のやうに一切の享樂を犧牲にしたのだ——とうとう享樂の泉、命をまでも。戀人は戀に、戰士は戰爭に、國民は國に死ぬる。彼等もヘルモンと全然同じさ。夢なんだ。皆。正義などといふ怪夢には人間は喜んで死ぬ。さて戀に死ぬものは同情を、國に死ぬものは名譽を得させられる。然もわがヘルモンのみは嗤笑を受ける——自分達も衆々歸依して神に殉じたヘルモンが同じ氏子仲間から嗤笑を

受ける。俺にはこの理由がさつぱり解らぬ。ヘルモンを啗ふ位の人は、なぜ、彼を啗ふ前にその啗ふべき筈の邪神を唾棄しないんだい——まあそれはどちらでもよいわ。ところでヘルモンだね、俺は思ふ、暴富豪トリマルキオに肩をならべる大饗宴を開いて自分は神聖な金錢を湯水のやうに使ふ。それを皆が樂しんで居る。これを見たヘルモンは、きつとその時大きなSacrilageを感じて、非常に憤激し悔悟したに相違ないのだ……（この時聽者の一人が何か口を挟みさうにした、それをマアクスは口で遮つて、彼は物を嚙みしめるやうな苦笑をした）まあ聽いて居給へ、實はヘルモンがその夢を見たと同じ晩にだ、白狀するが、俺も一つ俺のSacrilageをやつたのだ——御承知の通り俺の神はすべての努力を節約する讃べき「怠惰」だが。斯うなのだ、その晩俺は大きな半人半馬怪になつた。何でも話に聞く東方の大沙漠のやうなところに半月が低くかかつて居る、その極もない地平線を目がけて、俺は自分の大きな重い影を曳きずり乍ら驅けせられたのだ、一晩中！　それも西風のやうな速力で……」

人々はこの話をよく會得しようと暫く默つたが、直ぐに笑ひ崩れた——

I。「へえ！　その同じ晩だといふのだね。これは面白い。所謂奇蹟だ……」



M。「俺はマアクスとヘルモンとを組合せて一大喜劇を書くぞ……」

K。「オリムポス十二神の外に、讒謗（サタイア）を司る神などもあると見える。それが丁度その晩通りすがりに君達を訪れたのだ。」

M。「その神は、近頃、あの運命の姉妹神のうちの一番の意地惡奴と戀中になつて居るのぢやないかな。」

N。「兎に角、俺はホオレスとともにその愉快な神の氏子になる。」

マアクス。「それは君の勝手だ。皆して雀のやうに囀るがいい。（マアクスは苦り切つて居る）で、俺は十時頃になつて、やつと夢から解放された。身體はびつしより汗に濡れて、それに足は棒のやうだ。唯形だけは半人半馬怪では無くもとの俺さ。その時ばかりはさすがの俺も太陽や小鳥と一緒に五時頃に起きる習慣をつけて置けばよかつた、と痛切に早起きの德を感じたね——でも、俺は寢坊のおかげで四五時間も餘分に走らねばならなかつたのだ。それで眠から覺めても暫くは夢とは思ひにくかつた。夢だつたのだと自分を納得させはしたが、それでも、何だつてあんな無益な努力をしたらうかと考へると、その心持丈けはどうしても癒えない。俺

は怖ろしい。で俺はこれで丁度……六日、夜になつても眠られない事にして居るのだよ。俺にはヘルモンが實によく理解出來る。」

　さう言つてマアクスは欠伸をした。喋りすぎた上に眠いからであらう。暫くしてマアクスは口をもがもがさせて寢言の様な聲で呟いた。

「だが、何も死んで仕舞はずとも、よからうかなあ。俺のやうに、かうして、もう眠らない事にさへすれば。」



# 春宵綺談

或る晩、私は倶樂部でたつたひとりテーブルに肘を突いたままひどくふさぎ込んでゐる佐藤春夫の横顔を見た。そこで私は彼に近づいて、晩春のこんな美しい夜をどうしてそんな顔つきをしてゐるんだと尋ねた時に、彼は少しばかり風變りな話を私に聞かせた――

……その停留場に私は立つてゐた。つい一週間ほど前のある夕方のことなのだが。

と見ると、私の二間ほどさきのところに年のころ二十七八といふひとりの美裝した婦人がやつぱり電車を待つてゐる。美人だつたらうと思ふ。が、私の見たのはうしろ姿だけだ。それにしても何といふあでやかさであらう、と。見てゐると、突然、そのおしりのところへ紫色の夕闇のなかにフレンチバアミリオン色の?が、しかも三つ???かういふ具合に並んでありありと私の目に見えて來たのである。それはうつすらとしてゐたが、見つめてゐるうちに實にあざやかになつて來た。私はそれを凝と見据ゑてゐた。それでもその???は消えさらなかつた。

そのうちに電車が來て、その婦人は事もなげに電車に乘つてしまつた。が、私はぼんやり取り殘された。私は???をあんまり注視してゐたものだから電車へ乘りそこねてしまつてゐた。といふのは、その婦人がその場から動き去つてしまつてからも???だけはやつぱり闇のなかでさつきからの場所で宙に浮いてゐたからである。

???　その正體をつかまへてやらうと、私は思ひ切つて驅け出した――と思つたら、???はスウヽッと消えうせてしまつた。

それはもうわかつてゐるのだ。

あれや貂なのだ。

一たいあの停留場のあるあたりは、一名むじな坂と言つて昔から名うての場所なのだからね――ただどうも私にもよくわからない事は、そもそもあの???は一疋の貂が三つに化けたものだか、それとも亦三疋が正列して一疋がそれぞれに一つの?になつたものやら。僕が今考へ込んでゐるのは實はそのことだつたのだ……

――さう言つてかの男は世にも快濶な聲で笑つて見せた。



# A Miniature Tragedy

お嬢さんがヒステリイにかかつてゐる。ところが、正直なところ私はこのお嬢さんを一つ、ニッコリさせて見たいといふ不思議な情念を感じた。といふのは、このお嬢さんは、笑ふといふことが、何か身のけがれにでもなるやうに思ひ込んでゐるのじやないかと思ふほどな顏つきをしてゐたからである。そこで私は大たい次のやうなことを話し出した――

或るところにひとりの男がゐた。この男はあなたのやうな氣さくな方とは違つて大の神經質で、夜はなかなか寢つかない。――この人が世の中に役立つてゐることと言へばせいぜいねむり藥といふものは利かないものだといふことを證明するぐらゐのものである――で、さまざまな妄想の末には、よく惡夢にうなされる。この晩も、夜なかに廊下で何か忍足をする者があるやうな氣がした。確かにさうに違ひなかつた。そこでベルを押して人を呼んだ。すると快活な女中がさつそくやつて來て、その話しを聞くと、またかといふ顏つきをしてまるで相手にしなかつた。が、次の瞬間に何氣なく階段を一目ふりかへると、